870

教家庭叢書第一編

基督信者の要務

44. 6. 17
内交

020532－000－5

特61－870

基督信者の要務

浦川　和三郎／編

M44
ABI－0345

長崎司教認可

Imprimatur.

✠ *Julius Alphonsus*

Episc. Nagasakiensis

例言

本書は、片田舎の農夫漁人を標準として編んだのであるから、内容の卑近なのは言ふ迄もなく、辭句用語も極めて平易通俗を旨とし、寧ろ野鄙に流るゝも、通曉に苦む所ないやうにと努めたのである。

本書中、毎日の要務は、主として雜誌Ami du Clergéより、毎年の要務は、紀念日の默想を除けば全部聖アルホンソより抄譯し、其餘は、聖アルホンソを經とし、四五のManuel de piétéを緯として織出したのである。唯だ不器用な手に掛つた爲に、首尾不揃の點多きは、已を得ざる次第である。

本書の編纂に就て、靈父松川涼師の一方ならぬ助力を添うした。一言記して謝意を表する。

明治四十四年五月上旬

編者誌す

目次

緒言

毎日の要務

起床……九

朝の祈禱……一五

一、朝の祈禱を誦へる理由、二、朝の祈禱を誦へる方法、

默想……二四

一、默想の必要、二、默想の性質、三、默想の方法、四、書の讀めない人、五、時間のある人、

ミサ聖祭……四三
一、ミサ拜聽のすすめ、二、ミサ拜聽の心得、三、ミサ拜聽の方法、
勞働……六七
一、勞働は天主の命である、二、勞働は罪の償である、
食事……七五
一、食事に就て何を避くべきか、二、食事の時は何を守るべきか、
談話、其一、（潔白を害ふ）……八一
一、不潔な談を耳に入れな、二、不潔な話を自分ですな、
談話、其二、（友愛を害ふ）……八七
一、誹謗の結果、二、談話に就ての注意、

娯樂……九三
一、無害の娯樂、二、危險な娯樂、
職務、其一、（一般の心得）……一〇〇
一、職務を大切にせよ、二、職務を忠實に盡せ、
職務、其二、（家庭に於ける子女の要務）……一〇七
一、子女は愛嬌を以て家庭を幸福ならしめよ、二、子女は家庭に善德の花を匂はせよ、
靈的讀書……一一三
一、靈的讀書の利益、二、靈的讀書法、
聖体訪問……一二二
一、聖体訪問の理由、二、聖体訪問の利益、三、聖体訪問の方法、

コンタス……一三七
一、コンタスは優れたる祈禱である、二、「愛哉」を何十遍も反覆す理由、
三、コンタスを誦へる方法、
糺明……一五七
一、糺明の必要、二、一般糺明、三、特別糺明、
夕の祈禱と就床……一六八
一、夕の祈禱の必要、二、家内一緒に誦ふべし、三、就床、

毎週の要務

一週を聖くすること……一七七
一、日曜日、聖三位、二、月曜日、守護の天使、三、火曜日、十二使徒、

四、水曜日、聖ヨゼフ、五、木曜日、吾主の聖体、六、金曜日、吾主の聖心、七、土曜日、聖母マリア、
告白の心得……二三八
一、告白の利益、二、糺明、三、痛悔、四、決心、五、告白と償、六、糺明の前の祈禱、七、痛悔の理由、其一、其二、其三、其四、八、告白の後の祈禱、
聖体拝領前後の心得、其一……二八一
一、拝領前、二、拝領の時、三、拝領後、
聖体拝領前後の心得、其二……三一四
一、拝領前、二、拝領後、
聖体拝領前後の心得、其三……三三四

二、吾等の王なる耶蘇、三、吾等の師たる耶蘇、四、吾等の醫師なる耶蘇、五、吾等の夫なる耶蘇、六、吾等の救主なる耶蘇、七、吾等の善き牧者なる耶蘇、

毎月の要務

月の靜修……四〇九
一、月の靜修の必要、二、月の靜修の方法、
死の準備……四一四
一、死の默想、二、善終を準備する爲の宣言、三、善死を願ふ祈禱、

毎年の要務

年の靜修……四三六

一、靜修の性質、二、目的、三、利益、四、心得、五、時間割、六、默想に就ての注意、
靜修第一日、救靈の大切な事……四四八
仝第二日、浮世の儚い事……四六七
仝第三日、永遠の旅路に就て……四八八
仝第四日、罪に就て……五一〇
仝第五日、死に就て……五三二
仝第六日、審判に就て……五六一
仝第七日、地獄の悲嘆と天國の福樂……五八〇
仝第八日、耶蘇と聖母……六〇六

完徳の域に達したいと望む人の實踐ふべき徳行……六二七
基督信者の四大紀念日……六四五
一、洗禮の紀念日、二、初聖体の紀念日、三、堅振の紀念日、四、婚姻の紀念日、

目次終

公教家庭叢書第二篇

基督信者の要務

緒言

基督信者たるものは、皆な完全な人でなければならぬ。主基督は曰うた『汝等の天父の完全に在す如く、汝等も亦完全なれ』と。然し完全な人となるが爲には道は種々ある、必ずしも同一じ道を行かねばならぬと云ふことはない。一生涯、獨身で世を渡るものもあれば、一家を立て妻子を養つて行くものもある。修道院に引籠つて、祈禱とか、斷食とかに身を委ねる修道者もあれば、土を掘つたり、網を曳いたりする農夫、漁人などもある。隨分分け登る麓の

道は異つて居るが、然し心の底より天主を愛して、其聖旨に遵つて行きさへすれば、終には完全な人となつて同じ高嶺の月を眺めることが出來る。

世の人は、往々、自分の平生の行爲と、聖人等の驚くべき行爲とを見比べて、自分の爲ることは如何にも拙らぬ事のやうに思ふのであるが、天主は決して然うでない。假令、ありふれた、平常の事であつても、『天主の爲にする』と云ふ意向があり、また『天主の望み給ふ所だから』、『天主の攝理ひ下さつた所だから』と云ふ動機によつて爲さへすれば、世に拙らぬ事は一つもないのである。否、農夫だの、漁人だの〻賤しい仕事が、童貞だの、修道者だの〻聖い行よ

りか、仕樣によつては却て價値あることもある。

蓋し現世は廣大な舞臺見たやうなもので、人は皆な此舞臺に登つて其々に天主より割當てられた藝題を演てるのである。總じて舞臺の上では、王樣に扮つて拙い藝を演るよりか、乞食となつて巧く其役を勤めるのが稱讃されるが如く、天主の前でも、勤める藝題は何であらうとも、演狀さへ巧ければ必と喝采される、決して自分は農夫だから駄目だ、漁人だから天主の聖意に適へぬなんて、思ふには及ばない。

なるほど、聖人等の中には、高い大きな事を爲た人も隨分見受けられる。然し如何な聖人でも、朝から晩まで人目を驚かすやうな事

ばかり爲れたのでない。一つ驚くべき事をする中には、百も千も平常の事を行はれたに違ひない。

聖母マリアを見よ、御子三十歳の時まで何をして居られた。ナザレトの邑人の中に明し暮して、人々よりは唯だ憐むべき太工の妻としか思はれて居なかつた。勿論、當時の人々も、聖母を以て品行正しい、正直な、善良い婦人とは思つて居たであらう。然し是が天主の母である、婦人の中に祝せらるべき者である、萬代までも幸福なる者として讃美せらるべき者であると云ふことは夢にも知らなかつた。さらばとて聖母の聖行が一つとして天主の聖旨にも適はず、功力にもならなかつたとは云はれまい。

神學者等の說によると、成聖の聖寵を有つて居る人の爲ることは食べるとか、飲むとか、畑を耕すとか、漁をするとか云ふやうに、極く〳〵賤しい、拙らぬ事であつても之を天主に献げて、天主を愛する心でさへすれば、功力にもなり、聖寵も殖やされる、天の盡せぬ褒賞の基ともなるのである。

天主が初めて人間を造り給うた時は、實に僅少の土を以て其像を造られたのであるが、之に自分の神聖い氣息を吹き込み給ふや、忽ち立派な人間が出來上つた。信者の日々の行爲も此土見たやうに、極く卑しい、僅少なものである。然し之に聖愛の氣息を吹き込むと忽ち見違へるほど美はしいものとなるのである。

されば聖ポーロが『汝等食ふも飲むも、又何事を爲すも、總て天主の光榮の爲にせよ』と曰ひ、主基督も亦『天主に對して一杯の冷水を人に飲ましても、必ず其報酬があるものぞ』と曰うたのは、此道理を諭すが爲であつた。

然し何事も天主に献げて、天主を愛する心で行ふと云ふはナカナカ難しい、とても出來さうでないと思ふ人があるかも知れぬ、なるほど絶えず天主の事を思つて、自分の言ふ事、爲る事、一々之を天主に献げねばならぬと云ふのなら、六ケ敷い、とても出來る事でない。然し其れまでには及ばぬのである。之を聖堂に參詣する者に譬へれば、一歩々々『自分は聖堂に參詣する、自分は聖堂に參詣する

』と思はなくても、始めに其意向を定めて置きさへすれば、足は自づと其方向に進んで、思はず知らず聖堂の門に到着するであらう。

其れと同じく、何事も天主の爲に爲ようと云ふ志を朝一たび定めて置いたら、他に反對の志を發さない限りは、(罪など犯して)晩までも朝の志が連續いて効力あるものである。尤も時として、殊に重なる業の前、朝の志を新めたら、猶更ら利益あることは言ふまでもない所である。

基督信者たるものは、天主の聖恩で幸に眞の道を悟ること出來たのであるから、是非とも身を聖く修め完全な人となつて、天國に昇らねばならぬ。然し修道者なら兎も角、普通の信者では、朝も晩も

祈禱や、默想や、斷食やに從事つて居る譯には行かぬ。家も棄て、妻子も顧ずして信心ばかりして居るのは天主の聖意でもない。で彼等の爲には、平生の要務を正しく行ふより外に、完德に進むの道はないと云はねばならぬ。然ちば如何にして平生の要務を正しく行ふことと出來るであらうか。平生の要務と一口に云つても、毎日爲ねばならぬ事もあれば、毎週爲ねばならぬ事もある、毎月行ふべき事もあれば、毎年行ふべき事もある。今順を追うて、爲べき要務と、爲る方法とを記して見ようから、心ある人は其れに賴つて、自分の境遇と靈魂の力とに適當つた一定の規律を設け、敎導司祭の意見を仰いだ上で、之を朝夕の起居、動作の標準として欲しいものである。

但し其規律は成るべく簡短にして、守り易くないと可けない。何人だつて一足飛に大聖人になれるものでない。初めの程は過ぎたるよりも寧ろ足りない位が可い。足りない所は、力さへ增いて來れば何時でも加へる事は出來るが、一旦やりかけた所を後で中止めるのはナカ〳〵宜しくない。

毎日の要務

起床

『一日の計は晨に在り』と云ふ諺さへもある位だから、朝起きるのは何人にでも大切であるに相違ないが、殊に基督信者の身に取つては最も大切である。

人が眠つて居る間は、謂はば死んで墓に葬られて居るのも同樣で起きて床を離れるのは、恰度甦つて墓を出るやうなものである。されば基督信者の起床るのは、主基督が甦つて墓を出られた時の樣にありたいものである。

先づ主基督は朝夙く甦り給うた。三日目の朝になると、まだ夜もほの〴〵と明けない中に、サッサと墓を出て了はれた。大きな石を蓋した上に、封印して、番兵まで附けてあつたけれども、其甦りを沮めること出來なかつた。

是れ實に基督信者の爲に何よりの鑑である。總て朝寢は、身躰にも靈魂にも、百の害はあつて、一つの益はない。身躰は其爲に次第

に柔弱に流れて、少しの困難にも堪へきれなくなる。靈魂は猶更だ。もう時間がないから、朝の祈禱もろ〳〵にして仕事に取掛らねばならぬ。默想も出來なければ、ミサも拜聽されない。聖寵を戴く方法を一つも取ること出來ないから、誘惑の嵐が吹いて來ても之を防ぐ力がない。一度負けたら二度も負ける、二度のは三度、三度のは四度と始終負けて負けて、終には救靈までも失ふやうな始末にならぬにも限らないのである。

惡魔は其處を見込んで居るから、寢間には始終番兵となり、出來れば眼瞼には重い石蓋でもし、夜具には封印でもして、成るべく長く寢かしてやらうとする、夢々其手を喰つてはならぬ。時が來たら

ば床に火でも附いたかのやうに、岸破とはね起きねばならぬ。尤も其れは辛い、霜の朝、雪の日などは殊更ら辛いに違ひないが、其の辛い所を天主に献げたら、何よりも馨ばしい犧牲であらう。

次に主基督の甦られた時、二位の天使が天降つて墓の蓋石を取り外したが、其衣は雪の様に白く、其面は太陽の如く輝いて居たから、番兵等は膽を潰して倒れて了つた。

基督信者の床を離れる時も、天主が視て居なさる、守護の天使が附て居なさるから、假令、見る人がないにもせよ、成るべく肌を露さぬやう、又服を着畢つてからでなければ、人の前にも出ないやう心がけねばならぬ。『汝等謹慎を身に纏へ』と聖ポーロは曰つた。此

謹慎の衣こそ天主の聖意を喜ばせ、天使、聖人等の目を樂ませ、惡魔には膽を潰させ、我身の上にも天の祝福を豊に呼び降すのである。

終に主基督は墓を出るや、もう現世のものでなかつた。其思想も其志望も、其心も全く天に在す御父の方へと馳せ昇つて居たのである。

同じく基督信者たる者は、目が醒むると直に身も心も天主に献げねばならぬ。自分の心を献げて天主を想ひ、自分の口を献げて耶蘇マリアの聖名を誦へつゝ、聖母の聖衣や、メダイ等を恭しく接吻し、自分の手を献げて十字架の印をなし、跪いて次の祈を誦ふ

べし。

一、あゝ天主、私は伏して御身を拜み、心の底より御身を愛し、今日まで辱うしたる數々の御恩、殊に昨夜私を無事に護り下された御惠を感謝し奉る。

二、主よ、今日の思、言、行爲、痛苦は、總て耶蘇とマリアとの思言、行爲、痛苦に合せて御身に献げ奉る。又今日蒙られる丈けの贖宥は、悉く蒙りたいものと望み奉る。

三、今日は如何樣の事があつても、罪を犯して御身に背くまいと決心し奉る。主の御手を伸べて私を護り給へ。聖母マリアよ、御蔭の下に私を隱し給へ。守護の天使、保護の聖人、私を扶け給へ。

四、終に聖母マリアの元罪の汚なき御胎を祝し、其餘功を以て清淨の德を請ひ求めん爲に、天使祝詞を三度誦へ、一度毎に次の祈を加ふべし。

あゝマリアよ、御身の汚なき御胎によつて、我肉身を清からしめ我靈魂を聖ならしめ給へ、アメン

朝の祈禱

起きて顏を洗つたら、何はさて措き、先づ朝の祈禱をせねばならぬ。愚圖々々して居ると、思はず時間が立つ、人が來る、用事が起る、終には見す〳〵怠らねばならぬことになる。

一、朝の祈禱を誦へる理由

一、朝の祈禱は天主に對する義務である。

子女は毎朝、父母の前へ出て御辞儀をする。御辞儀もしない子女は躾が悪いと賤められる。朝の祈禱は天に在す御父に對する御辞儀である。躾の善い基督信者は決して之を怠つてならぬ。

天主は我等の父たると共に亦主君である。主君に對して相當の禮を盡すは臣僕の義務でないか。然し日中は人も來る、用事もある、海に野に働もせねばならぬ、天主の事を思ひ出す餘裕さへない。だから責めて朝、まだ人も來ない、仕事にも取り掛らない前に、祈禱をして臣僕の道を盡すのである。

一體祈禱と云ふものは、人が天主に對して服從、尊敬、愛慕など

の情を表はす爲に捧げる貢物で、必ずしも朝の祈禱に限ると云ふ譯ではない。然れども朝の祈禱を怠る位なら、況して他の祈禱をする筈がないから、隨つて人の人たる義務を果さないで、全で犬猫同樣になつて了ふ。嘗てフランスがアフリカのアルゼルを征伐した頃、一人の將校が敵の捕虜となつた。一日如何した機でか護衛の兵士が件の將校に向つて、『クリスチアンの犬奴！』と怒鳴つた。『犬』と言はれて將校は怒るまいことか、火の如になつて、『ナニ、俺を犬と曰ふか、貴樣の捕虜となつては居るが、貴樣と同じ人間ぢやないか』と曰ふと、兵士は如何にも輕蔑んだ調子で、『御前が人間ッて！善う考へて見ろ、御前が捕虜となつてから早う六箇月になるが、未だ一

度でも祈禱をしたことがあるか。御前は人間と曰はれたからうけれども、如何して人間でありやしない、犬ぢや、犬ぢや』と曰つた。其れには流石の將校も開いた口が塞らなかつたと云ふことである。

二、朝の祈禱は大に自分の益になる。

一日の中に爲べき事はナカ〳〵多い。隨つて天主より助けて貰ひたい、導いて貰ひたい、强めて、慰めて貰ひたいと思ふことも隨分あらう。朝の祈禱を以て其等の惠を願つて置くのである。

一日の中には如何なる艱難苦勞の重荷を背負はねばならぬか知れぬ。朝の祈禱の時、豫め之を天主の御手に獻げて、主基督がゲツマニアの園に於て祈られた如く『主よ、出來るものなら此艱難を、此

苦勞を私より遠け給へ。然し私の意の儘を成したいのでない、聖意の儘を成し給へ』と祈つたら、亦主基督の如く、勇み進んで之に耐ゐる事が出來るであらう。

猶ほ一日の中には、惡魔の誘にも勝たねばならぬ、過失も改めねばならぬ、德も修めねばならぬ。然し自分は虛弱いもので、天主の御助がなくては何一つ出來やしない。朝の祈禱を以て其御助力を願つて置いたら安心でないか。

斯う考へて見ると、朝の祈禱はナカ〳〵大切である、決して一朝でも怠るべきものでない。朝の祈禱を怠つて天主の御助力を願はなかつた爲に、脆くも惡魔の誘に負けて、救靈までも失ふやうな不幸

に陥らぬにも限らないのである。

二、朝の祈禱を誦へる方法、

朝の祈禱はなるべく怠つてならぬ。然し怠らぬ許りでは足りない善く誦へねばならぬ。善く誦へるが爲には

一、場所が肝要である。即ち十字架の前か、聖母の聖繪の前かに跪いて、自分は今天主の尊前に居るのだと思つて誦へねばならぬ。衣服を着ながら、路を歩きながら、火に煖りながら、仕事を爲ながら誦へては、とても善き祈禱の出來よう筈がない。

二、徐々誦へねばならぬ。御威光限りなき天主に向つて御辞儀するのである。自分ながら、何を言つてるのか分らぬ位に口早く誦へる

のは無禮であるまいか、左樣に急いで始から終まで誦へるよりか、半分でも、四分一でも、徐々誦へた方が、天主の聖意にも適ふし、自分の益にもなる。

三、氣を注けて誦へねばならぬ、毎日々々同一じ詞を誦へるのだから、終には習慣になつて格別意を注めなくなる、色々の拙らぬ想像も脳裡に浮み出る、唇は動く、聲も聞える、然し心は何を言つたか分らぬで祈禱を畢ることも珍らしくない。是では折角祈禱をした甲斐がない。是非とも、祈禱の文句に注意して恭しく誦へるか、或は其詞の意義を案へながら誦へるか、或は自分が天主に乞ひ受けたいと望んで居る聖恩を想ふか、或は天主の事や、耶蘇基督の事や、御

降誕、御苦難、聖体の事や等に意を専にしてか誦へなければならぬ口先ばかりで誦へても天主の耳には達かない。

然らば如何にして、心の散るのを防ぐこと出來るであらうか。先づ目的を確と定めるが可い。父母の病を癒して貰ひたい、試驗に及第さして貰ひたい、遠方に往つて居る夫を是非無事に歸らして戴きたい等と心より望んで祈る時は、誰でも熱心になる、心など散らしはしない。然らば朝の祈禱の時も、誰某の爲に祈らう、何々の聖恩を願はう、此罪を避ける、彼德を修める力を乞ひ求めやうと云ふ風に、確と目的を定めて置いたら、容易に心の散るのを防ぐこと出來るであらう。

次に祈禱を始める前に、一寸天主を念ひ出すが可い。暫くの間、地を離れ、側の人や、身邊の事を忘れ、心を天に上げて、『天主が茲に在す、自分の言に耳を傾けて下さる、自分は今天主に向つて御話するのだ』と思つたら、餘程心が引緊つて來るに違ひない。

すべて朝の祈禱の目的は三つある。

一、天主を拜禮して、今迄蒙うした聖恩を感謝する。

二、自分の思、言、行を天主に献げる。

三、罪を避け德を修むるに要する聖寵を乞ひ求める。

だから、心が非常に散亂れて、何を誦へたか自分ながら分らなかつた時などは、此の三つの目的に從つて、主禱文、天使祝詞、榮誦

を各〳〵三遍づゝでも熱心に誦へて補ふことにするが可い。

默　想

一、默想の必要、

朝の祈禱の後、暫く默想することを忘れてはならぬ。默想は救靈の爲に最も肝要である。默想しない人は、永く天主の聖寵を保ち、終を全うすることはナカ〳〵難しい。聖書にも『地は荒れに荒れた一人でも心に觀念へるものがないから』とあるが如く、世に罪惡の蔓り榮えて、地獄の猛火に投げ込まれる靈魂の引きもきらずあるのは、實に永遠の眞理を想はぬからである。死去だの、審判だの、地獄だの云ふことを、明暮、腦裡に浮べて忘れなかつたら、決して地

獄なんかへ落ちる樣な淺ましい身とはならないのである。試に今地獄に苦んで居る靈魂等に向つて『汝等何故こゝに落ちた』と尋ねて見よ。『地獄を想はなかつたから』と大概のは答へるであらう。

默想は實に心の暗を照す光明である。永遠の旅路に輝く太陽である。隨つて默想しないものは、暗夜に旅行をする愚者と云はねばならぬ。救靈の大切な、罪の惡むべき、地獄の怖るべき事など迚も觀ることと出來ない。躓いて、轉んで倒れるのは不思議ではない。故に聖女テレヂアは曰つた、『默想に懶ける靈魂は、惡魔の手は借らなくても、自分で地獄へ飛び込む』と。

世にはコンタスなど怠らず誦へながらも罪惡の中に沈淪んで居

る人を見るのは珍しくないが、かねぐ熱心に默想する人で、罪惡に親んで居るのを見ることはない。默想と罪惡とは兩ながら立つて行けるものでない、默想を止めない人は必ず罪惡を棄てる。

默想は唯だ罪を避けるに必要なるのみならず、善を行ふにも亦極めて大切である。すべて聖人等は、默想によつて聖人となられたのである。鏡に向つてころ顏の汚點も見られる、化裝もされる。默想は心の明鏡である。不足も、過失も、罪の汚も、鮮かに斯に映るから、慚かしくて、ジットして居られない。一日でも早く其汚點を洗ひ落して、身分相應に善德の化粧を施したくなる。

其上、默想をすると、永遠だとか、天國だとか、地獄だとか云ふ

樣な大切な思想が始終腦裡に浮んで來るので、容易に罪を怖れ、德を愛するやうになるのみならず、耶蘇基督や、聖母マリアや、諸天使、諸聖人等と途伴になつて、天國の旅行をすることになるから、慰めても貰へる、勵ましても貰へる、注意しても貰へる、倒れても直に手を取つて引起して貰へる、是より安全な旅行はないのである。

二、默想の性質、

『默想はなるほど必要であらうが、ナカ〳〵難しくて、とても普通の信者の行ひ得べきことでない』と思つて居る人が多い。之は默想の性質を知らない所から發る間違ひである。

然らば默想とは何であるか。

默想とは勉强でない。勉强には重に頭を使ひ、默想には却て心を働かせる。だから默想する爲には澤山な智識は要ない。何にも知らぬ田夫野人でも、天主を一心に愛するものは立派に默想することが出來る。

默想は讀書でもない。讀書は汽車の窓から四方を覗いて見るやうなもので、山でも、川でも、瞬く間に飛び去つて了ふ、意をとめて打見やる餘裕がない。默想は寧ろ筋を駐めて、ゆる〳〵山川の景色を眺めるのに譬へたら喩へられやう。

然らば默想とは何であるか。

默想とは天主と親しく、蜜のやうな談話を交換すことである。子が

父と、妻が夫と、友が友と物語るが如く、天主と物語る事である。

なるほど天主が親しく顯はれて、人の耳にさゝやき給ふことはあるまい。然しながら、胸に善い思想が發り、心に美しい感情の燃ゑる時は、之れ天主の聲の響くのであるまいか。

默想は天主と物語ることであるとすれば、たゞ天主に向つて、『私は御身を愛しまする』とか、『私の罪を赦し給へ、主よ、私の罪を赦し給へ』とか繰返し〳〵言つたばかりでも、既に立派な默想である。だから默想は決して難しいものでない。何人にでも出來る。爲る氣にさへなれば、出來ないものはない。人は自分が好いた事が、自分の利得になる物なら、始終忘れずに思ふでないか。天主を愛し、靈

魂を大切にする氣がありさへすれば、自然其等の事を考へる筈である、何の難かしい事のあらう。

三、默想の方法、

默想の方法は種々あるが、普通の信者の爲には極く簡短なのが可い。時間も十分か十五分で澤山だ。須常念とか、御苦難の默想とか基督の摸範、善終の準備、或は本書の末尾に載せてある默想とかを讀んで暫く考へる、考へては又讀む。然うして感じた時は、自分の身の上に就て自分の不足などに就て天主と物語る、罪の赦を願ふ、天主の聖寵を求める、一日の中に爲すべき事も段取をする、終に堅い決心をして天主の御助を祈ると云ふ風にして足りる。

『然し自分はナカ〳〵忙しくて、朝の祈禱さへ出來かねる位だから、とても默想なんぞして居る時間はありやしない』と云ふ人がある。

實際十五分の時間でもなければ、五分でもよい。書を取つて一頁ぐらゐ讀んでも足りる。一頁も讀まれぬと云ふなら、三四行でも仕方がない。それでも讀む暇がないのなら、責めて、天國とか、地獄とか、永遠の生命とか云ふことを、顏洗ふ間にでも少し注意して想つたら、罪を避け善を行ふに、餘程加勢になるであらう。

聖女ヨハンナ、デ、シャンタルは、毎朝、子女を右左に坐らせて朝の祈禱の後十五六分の間、死去、審判、地獄などに就て默想さし

て居た。長女の十一歳になるのがナカ〳〵熟心で、十五分間、全で脇目もふらずに默想して、終へば必ず、自分の默想へた點を正直に母に語つて居たと云ふことである。信者の家庭に皆な恁う云ふ習慣が行はれたら、如何に喜ばしい事であらう。

四、書の讀めない人は如何する、

書が讀めなくても默想は出來る。

一、四終に就ては、說敎にも度々聽くし、殊に死去なんぞは、自分で何遍も見もするし、聞きもするし、默想するのは格別難しくない。

二、主耶蘇の御苦難も、書はなくても默想される。十字架其物が既

に立派な書である。斯書の中には罪の惡むべき、天主の愛の限りなき、救靈の大切なことなど、鏡にかけて見るよりも明に讀まれる。

昔しコリオネの尊者ベルナルドが、書を學はうかと十字架に向つて尋ねた時、主は答へて『書を學つて何する、私が汝の書である、私で十分でないか』と曰うた。されば十字架の道行か、或はロザリヨの悲の玄義かの一つを採つて、其時、其場合、其人物などを想像し因つて以て、同情だの、感謝だの、痛悔だの、熱愛だの云ふ感情を發して、自分の日々の課業にあてはめて決心する。之れ實に立派な默想ではあるまいか。

三、時によつては、告白の形にすることも出來る。即ち天主の十誡

聖會の制令、七の罪源の中から何か一つを取つて、詳しく糺明する。糺明した上では、十字架の前に跪いて主耶蘇に告白し、暫く心を靜にして、主の御意見や、御咎や、御勸告やを承はり自分の不足過失を改める方法を尋ねる、終に決心をして聖寵を祈る。是も立派な默想である。

五、時間のある人は如何する、

時間があつて、毎朝、二十分間、或は半時間宛も默想される人は實に幸福である。其爲に、幾ほど思想は高尚に、判斷は賢く、決心は固く、德は完全になるであらうか。

斯る人の爲には、常に默想を、準備と、本部と、結尾と三部に分ける。

一、默想の準備、

一、默想すべき要點を、前晩より荒まし讀んで置く。

二、床に就く時、目の醒めた時、面を洗ふ時にも、默想の題目を想ふ。

三、朝の祈禱の後、十字架の前か、聖繪の前かに跪いて、心を鎭め、思を收めて、次の祈禱を誦へる。

信仰

主よ、私は今、御身の茲に在すと信し、深く謙つて、御身の稜威を敬ひ拜み奉る。

謙遜と痛悔、

主よ、私は御身に背いた罪人であれば、今地獄の底に苦んで居る筈である。一心に悔み悲み奉る。御仁を掛けて私を憐み給へ、私の罪を赦し給へ。

祈願、

永遠の御父よ、耶蘇とマリアに對して、私を照し給へ。この默想の効果を收むるを得せしめ給へ。

四、次に天使祝詞を一度誦へて聖母の助力を求め、猶ほ聖ヨゼフ、守護の天使、保護の聖人にも賴むべし。但し是等の祈禱は、成るべく簡短に、熱心に、口でよりか寧ろ心で誦ふべきものだと云ふことを忘れてはならぬ。

五、題目次第では、默想の始に場所や、人物やを想像して、眼前に眺めるやうにすれば、心も散らず、感情も起き易い。例へば、御苦難に就て默想する時は、主が十字架に磔けられ、全身傷き破れ、鮮血に塗れて居給ふ其足下に、聖母が、ヨハネ、マダレナ等と共に涙に咽んで佇んで居られる場合を想像する、死去に就てであれば、氣息奄々に悶へ苦んで居る病人の傍に、父母も、妻子も居列んで連りに涙を流し、司祭は最後の勸告を爲さんとて、枕頭に立つて居る場合を想像するのである。然し問題を想像に描き出し難い無形物であれば、强ひて此方法を用ふる要はない。

二、默想の本部、

準備が一通り濟んだら、書を開いて心靜かに讀む。讀んでは觀察へ、觀察へては讀み、丁度鳥が水を飲むに、一滴口にすれば直に頭を天に上げるが如くせねばならぬ。心の感動する所に至らば何時迄も止つて味ふべし。必ずしも全編を讀んで了はうと焦せるには及ばぬ。

然し讀んで觀察へるばかりが默想でない。默想に大切なのは、觀察よりも寧ろ感情と、祈禱と、決心とである。觀察は之を譬へると針である。觀察の針の進む後から、感情、祈禱、決心などの金絲が隨て行かぬでは、ろれころ骨折損の草臥儲であらう。

一、感情、

觀察へて、心が感動するよと見たら、直に心を天主の方に上げて謙遜だの、感謝だの、捧獻だの、念、取り分け、愛とか、痛悔とかの情を發して天主と物語るべし。例へば次の如き祈禱を反覆し〳〵誦へて愛情を發すが可い。

主よ、私は御身を何よりも貴重び奉る。
主よ、私は心の底より御身を愛し奉る。
主よ、私は御身が万民に愛され給はんことを望み奉る。
主よ、私は聖旨の全く行はれんことを祈り奉る。
主よ、我と我身に就ては、聖旨の儘に計ひ給へ。

二、祈禱

感情は大切であるが、謙遜と深く頼むの心とを以て、天主に必要の聖寵を祈るのは猶更大切である。

默想中に、自分には如何なる聖寵が必要であるか覺るであらうから、其を一心と願はねばならぬ。誘惑に勝つ爲に、弱き心を引立てる爲に、天主の思召に身を能く任せる爲に、終を全うし得ん爲に、殊に天主を心より愛せん爲に要する聖寵を、熱心に祈らねばならぬ。

『願へよ、然らば與へられん』と主は曰うたでないか。默想の時は天主の尊前に進んで、天主と親しく物語して居るのであるから、願ふには最も都合の好い時である。

默想は靈魂の呼吸と謂はれる。人が呼吸する時、空氣を吐き出しては又吸ひ込むが如く、靈魂も、身を獻げ、熱心に愛し、痛悔なぞして、自分の感情を天主に向つて吐き出し、祈禱を以て、天主の聖寵を吸ひ取るのである。

三、決心、

默想の終には決心を固むべし。たゞ一般に今より罪は犯すまい、善は行はうと決心した許りでは益がない。細かに、一々の場合に當て決心せねばならぬ。例へば、かく〳〵の人に對して特別に堪忍を守り、某の命令には直に從ふ、彼の誘が起つたら斯うして防ぐ今日は此事に就て斯う制慾するなぞ決心せねばならぬ。して其不足

を改め、其德を修め得る迄は、幾度でも同じ決心を反覆すが可い。

猶ほ天主に對して誓願でも立て居る人は、毎日默想の終に、其誓願を新にするのは、ナカ〳〵益になる事である。誓願は立て居なくても、信者は責めて洗禮の時に、『惡魔を棄て、天主に從はう』と約束して居るから、其約束を新にすると、功德にもなれば、天主の聖寵も受けられる、心も自づと引緊つて來るであらう。

三、默想の結尾、

默想の結尾にすべき事は三つある。

一、默想中に天主より戴いた御光を感謝する。

二、決心した所を直に實行ふべき手筈を定める。

三、耶蘇とマリアとの聖名によつて、決心を守る爲めの聖寵を天主に祈願ふ。

四、猶又、默想の効果を失ふまいと思はゞ、默想中に眺めた教訓の花の特に立派なのを一枝折りて持ち歸り、終日之を眺めると云ふことを忘れてはならぬ。語を換へて曰へば、默想中に殊更ら自分が感じた文句を一つ二つ記に置き、時々之を思ひ出して、以て熱心を冷さぬやう心掛くるが肝要である。

ミサ聖祭、

一、ミサ拜聽のすゝめ、

主日と祝日との外は、ミサを拜聽しなくても罪でない。然し罪で

ないから拜聽するには及ばぬと思つてはならぬ。もし近いあたりに主耶蘇が現はれて、自分を竢つて居なさると云ふなら、如何に喜んで駈け附けようとするであらうか、たとひ半時間、一時間は早く起きても、たとひ無理な繰合はしても、是非とも御目に懸ちうとするであらう。

處が耶蘇は毎朝、聖堂に現はれて、我等を竢つて居なさる。態々祭壇の上に身を犧牲に供へて、我等に代つて父の天主を拜禮し、其恩を感謝し、我等の罪を贖ひ、必要の恩寵を願つて下さる。實に自分の宅から程遠からぬ所に、神の貴い御血が灌がれてある。往つて其聖祭に與つたら、莫大の聖寵が與へられるとは知りながら、罪で

もないのに、眠い目を刮つて行くには及ばぬと濟し込んで居るとは餘りに慾が少いと曰はねばなるまい。

尤もミサを拜聽する爲には、朝も多少早く起き、時間も多少潰さねばならぬ。然し辛い所を天主に献げて夙く起さるのは、少からぬ功德である上に、天主の爲に潰した時間は常に百倍にして酬いらるると云ふことを忘れてはならぬ。聖イシドルは貧しい農夫であつたが、毎朝缺かさずに、ミサを拜聽して居た。天主は彼の熱心を嘉し給ひて、彼が聖堂に在る間に、天使を遣はして其畑を耕さし給ふことも往々あつた。我等の爲には左樣な奇蹟は行つて下さるまい。然し、天主は是非とも奇蹟によらなければ酬ゆること出來ないと云

ふ譯でない。主耶蘇は曰うたでないか、『汝等先づ神の國と其義とを求めよ、然らば現世のものは皆な汝等に加へらるべし』と。兎も角も、毎朝ミサを拜聽するのが家業の上に損を招くか、益を來すか、試に一ケ年でも嘗して見たら分るであらう。

二、ミサ拜聽の心得、

金口聖ヨハネ曰はく『司祭がミサを捧げる時、天は開け、數多の天使は祭壇の右左に天降つて、恭しく拜聽し給ふ』と。又實際、聖者がミサを執行はれる時、天使等が數多群り降つて手傳ひされるのを、聖者の弟子のニル修院長は見たことがあつたさうである。

ミサは斯う云ふ聖い祭であれば、ミサ拜聽に行く時は、カルワリオ山へ登るのだと思ひ、祭壇の前に在る時は、天主の玉座の前に、天使等と共に侍つて居るのだと思はねばならぬ、恁う考へたら、體自ら正しく、容自ら恭しく、念は靜かより、注意も深く、熱心も燃えて多大にミサの功德を蒙ることが出來るであらう。

舊約の時代に、猶太亞の民が天主に獻げて居た犧牲は、牛とか、羊とか、鳩見た樣なものに過ぎなかつたに、彼等が其祭に與る態度と來たら、感心の外なかつた。七百の司祭、補祭より、幾萬の男女聖堂の内外に充溢れて居ながら、全く人なき荒野にでも居るかのやうに、少しの物音すら聞えなかつたと云ふことである。

舊約の祭は、ミサ聖祭の影たり、象徴たるに過ぎなかつたのに、

斯くまで深い敬意を表はして之に參與つたと云ふならば、況して汚なき神の羔、神自らが犧げられ給ふ此聖祭は、如何ほど熱心に、靜寂に、注意して拜聽すべきであらうか。

有名なるアムボロジオ聖者は、此道理を深く辨へて居られたから福音を讀み了ると必ず信者に向つて、『心を鎮めよ、物靜かにせよ、咳嗽でもすな』と懇に說諭されたので、信者も其敎訓に感じ、謹み愼みてミサを拜聽し、天の祝福を豐に蒙ることが出來た。

三、ミサ拜聽の方法、

ミサ拜聽の方法は種々ある。祈禱文を手にして、司祭の誦へる祈禱、行ふ儀式に從つて、自分も其祈禱を誦へるのも可ければ、コンタスを爪繰るか、主耶蘇の御苦難など默想するのも惡くはない。然し人類が天主に對して盡さねばならぬ四つの義務を果す考で拜聽するのは、最もミサ聖祭の目的にも合ひ、主耶蘇の聖意にも適ふことであるから、今左に其方法を示すことにする。

ミサの始、

司祭が祭壇の下に立ちて、告白の祈を誦へる時は、主耶蘇がゲッマニアの園に於て、血の汗を絞つて祈られたことを懷ひ、自分の罪を糺明して、心の底より悔み悲むと共に、十分の尊敬と熱心とを以て、此聖祭に參與ることを叶ふ樣、聖靈の御力と聖母の御助とを乞ひ願ふべし。

一、入祭文より福音まで、　拜禮せよ、

抑も天主は天地萬物の大君にして、御威光限りなく在せば、よし諸々の天使聖人、否な天使聖人の元后たる聖母マリアが其天使聖人を恐く〳〵率き從へて、心を盡し、力を盡して尊崇び拜禮まれても、到底ろの限りなき御威光に當るには足りない。況して賤しい、汚らはしい罪人に於てをやである。

唯だ相當に斯天主を尊崇び拜禮むことの出來るのは、天主にして人、人にして天主たる耶蘇基督だけである。されば今耶蘇基督は、人類に代つて身を祭壇の上に犧牲にして、父の天主を尊崇び、拜禮んで下さるから、共々に深く謙つて、自分は此の廣大無邊の稜威

の前には、有つても無き樣なものだと思ひ、心も容も恭しく、聖母と共に申し上げねばならぬ。

あゝ天主よ、私は御身を我主、我君と恭しく拜禮し奉る。私を無より造り出して、生命も才智も、能力も、財産までも賦へて下さつた全能の天主と拜み尊び奉る。御身の限りなき御威光に對しては、限りなき尊敬を盡さねばならぬのであるが、私は哀れな、卑しい罪人で、トテも〳〵出來る事でない。幸ひに耶蘇基督が、今祭壇の上に深く自ら謙つて、御身を尊敬ひ拜禮んで下さるから、ろれを私のため、又總ての人々の爲に、謹んで献げ奉る。

主よ、御意に善く適ひ給ふ此聖子を顧み給へ。私も聖子に倣つて

御身の稜威の前に謙り、心を合せ、感情を同じうして拜み尊び奉る。願くは私の謙遜、拜禮を、御子の謙遜、拜禮に合せて、之を聖母の汚なき御手より受け納め給へ。

天主の聖母マリアよ、私を助けて、主を一心に拜禮ましめ給へ。

暫く書を塞いで、心の中に今の祈禱を幾度も反覆し、天主が此祭に因つて限りなき光榮を受け給ふことを、聖母と共に悅びて申上げよ。

主よ、御身は此聖祭によつて、限りなき光榮を受け給へば、私は深く滿足し奉る。心の底より躍り喜び奉る。

必ずしも本書の文句を其儘用ふるには及ばないから。信心の燃ゆ

るに隨ひ、自づと心より湧き出る語を自由に用つて拜禮するが可い。たゞ心を慎み、自分の虛無しきことを認めて、いよ〳〵深く謙るべし。之れ天主を拜禮するに最も適當な方法であるぞ。

二、福音より聖体奉學まで、　感謝せよ、

自分が是まで戴いて居る聖恩を數へて見たら、濱の眞砂よりも、秋の夜の空に輝く星よりも遙に多いであらう。どうで、聖母と共に『權能ある者、我に大なる事を成し給へり』と叫ばずに居られまい。是からも亦幾度の聖恩を戴くことであらうか。斯る大恩に何を以て報酬ゆることの出來よう。唯だ祭壇の上に天降つて下さる耶蘇基督に縋るより外ないのである。耶蘇が今人類に代つて、父の天主に感

謝して下さるのを仰視て、自分も諸〳〵の天使聖人、特に聖母マリアと心を合せ、聲を揃へて申上ぐべし。

主よ、私は、主が人類一般に降し給うた聖恩と、私一人に施し給うた御慈仁の雨露に潤ひつゝ、慎んで御前に出で奉る。主の御慈仁は限りなく、其聖恩は量りなし、如何して私は此の御慈仁に報い此の聖恩を感謝すること出來よう。唯だ聖母マリアと心を合せ、敢て司祭の手を以て尊前に献げ奉る此の聖き御躰、此の價貴き御血此の汚なき神の羔を、聊か謝恩のしるし迄に受納め給へ。

此犧牲は、限りなき價を備へ給ふが上に、主の聖意にも善く適ひ給へば、私が是迄添うし、又今後も添うするであらう數々の聖

恩に酬ゆるにも足りるものと、私は信じ奉る。

諸〳〵の天使、聖人、別けても慈仁の母なるマリアよ、私と共に天主に感謝し給へ。このミサ聖祭のみならず、今日全世界に執行はるゝのまで、悉く之を主の尊前に献げて、私が主に賜はつた數限りなき恩惠を感謝し給へ。

斯樣に心の底より感謝したならば、主は如何に喜んで受納れ給ふであらうか。殊に献げる犧牲には限りなき價値はあるし、必と滿足に思召し給ふであらう。

愈々ます〳〵心情を燃やし、天國の天使聖人、取分け自分が常に尊び敬つて居る聖人等に頼み、諸共に感謝して戴くべし。

親愛なる保護の聖人等よ、私に代つて天主に感謝し給へ。私は生きては主の大恩を忘れず、死しては天國に於て、主の御慈仁を一心に讃美したい。主が私の志望を顧み給ふ樣、又御子耶蘇が此祭壇の上に犧牲となつて、私の爲に献げて下さる感謝をも快く受納れ給ふ樣祈り給へ。

幾度も〳〵繰返して、益々熱心を興すべし。たとひ主の聖恩は限りなきにせよ、是に由つて十分の感謝を献げること出來るであらう。

三、聖体拝礼より聖体拝領迄、　罪を贖へ、

自分が今迄犯したる罪科を數へて見たらば、天主に對して如何な

る債務を背負つて居るかゞ分るであらう。唯た一の大罪でも、天主の正義の秤でかけると、諸〳〵の聖人等の立られた功力よりも遙に重い。で、天主の義怒を宥めんには、天主にして又人たる基督が、十字架の上にて其の價貴い御血を絞らねばならなかつたのである。

ミサ聖祭に於て、此聖血は正しく天主の尊前に献げられ、人々の爲に、哀憐と罪の赦免とを祈つて止まないのである。嘗て十字架の上より、『彼等は其の爲す所を知らざるによりて赦し給へ』と父の天主に向つて絶叫ばれた耶蘇基督は、今も此祭壇の上より、同一じ語を反覆して絶叫び給ふのである。縱し人々の聲は拙く、聞きづらいにせよ、此の聖聲に合せて、罪の赦免を絶叫んだものなら、仁

愛深き御父ではあるし、如何しても聽き容れずには居られないのである。

猶は聖母マリアが十字架の下に佇んで流された御涙を想ひ、共々に涙の袂を絞りつゝ、深く謙つて申上ぐべし。

あゝ天主よ、私は幾度も聖恩を忘れ、御憐に背き罪に罪を重ねたる謀叛人である。今御足の下に拜伏して、心の底より悔み悲み奉る。御子耶蘇が深く自ら謙つて、獻げ給ふ此ミサ聖祭を、罪の償として、謹んで尊前に羞め奉る。主よ、この耶蘇の御功德この耶蘇の御血、この耶蘇御自身をば聖母の御涙と共に、馨ばしき犧牲として嘉納め給へ。

今耶蘇は此祭壇の上に犧牲となつて、私の爲に傳達ぎ、ろの價貴き御血を灌いで罪の宥恕を求めて下さるから、私も其の清々しい御血の聲に、私の濁つた聲を合せて、御哀憐を偏に祈り奉る。願くは私が今迄犯したる數限りなき罪は勿論、世の總ての人の罪愆までも悉く赦し給へ。

耶蘇の御血は御身に向つて哀恤を絶叫び給へば、私も痛悔の涙を揮つて諸共に絶叫び奉る。主よ、たとひ私の涙には感動され給はずとも、御子の飲泣と聖母の祈禱とを顧み給へ。耶蘇は十字架の上にて、人類一般の爲に罪の宥恕を乞ひ受けて下さつたのに如何して私の爲にも此祭壇の上より宥恕を求め得給はぬであらう。

主よ、私は此の價貴き御血と、御身の愛し給ふ聖母マリアの御祈禱とに頼つて、私の罪は悉く赦して貰へるものと堅く信じ奉る。

私は死ぬまで罪を悔み悲みたい。伏して冀くは世の哀なる罪人にも、疾く其罪を悔い悛めて、宥恕を蒙るやう聖寵を惠み給へ。

暫く書を閉ぢて、幾度も〳〵痛悔の情を發し、涙を揮つて悔み悲むべし。りの痛悔の涙は、聖母の汚なき御手を以て、必と御子の尊前に捧げられ、罪の宥恕と、主の御哀憐とを、豊に呼び降して呉れるであらう。

天主の聖母マリアよ、私の痛悔の眞情を照覽し給へ。私は此祭の功德に由つて、罪を悉く贖ひたく思ふ。願くは私にも、聖ペトロ

の如く泣き、聖女マダレナの如く痛悔し、大罪人より悔い悛めて大聖人と爲られた人々の如く、悲み慟くを得せしめ給へ。

天主の尊前に畏つて、いよ〳〵ます〳〵悔み悲むべし。たとひ如何なる罪人であらうとも、悔悛の赤心さへあれば、此祭の功德によつて、天主は必ず其罪を忘れ、其債務を免して下さるに相違ない。

四、聖体拜領より終迄、　恩惠を乞求めよ、

司祭が聖体を拜領する時、自分も拜領すること出來なければ、責めて熱き望を以て、靈的拜領を爲すべし。之が爲には、新に祭壇に生れ給うた嬰兒の耶蘇を、聖母の御手より拜領かると想像するか、

或は今、十字架より下され給うた耶蘇の玉躰を、聖母が親ら運んで來て自分の心に葬り給ふと想像するかして、熱い〳〵望を發せば足りるのである。

既に靈的拜領を爲したら、自分の心に實在す耶蘇を打眺ゆ、『今耶蘇は私の爲に祈つて下さる』と思ひ、賴母敷い心を以て、必要の聖寵を乞求むべし。心を廣くせよ、天主の御子が祈つて下さるのであるぞ。若し聖母マリアが、自分の祈を傳達いで、天主に捧げて下さると云ふなら、人は如何に賴母敷く思ふであらうか。況して天地の大王たる耶蘇基督が其價貴き御血を獻げて祈つて下さるのだから、如何なる恩惠でも、願つて與へられぬと云ふことはない筈である。

怖るゝには及ばぬ、身は如何な罪人であらうとも、祈はもう罪人の祈でない、主耶蘇の祈である。僅か二つ三つの恩惠を願つては足りない、自分の爲、全世界の人々の爲、大きな恩惠を數限りなく願はねばならぬ。天主は限りなき御方である。人が限りある身を以て如何ほど澤山願つたとて、天主の御手が空虛うなる氣遣はない。

あゝ天主よ、私は數限りなき罪を犯して、御身に背いた惡人であれば、御身の恩賜を辱うするに堪へない、私の願を聽屈けて戴くに堪へないものである。然し主よ、御子耶蘇の聖顏を顧み給へ、今此祭壇の上に犧牲となつて、其の價貴き御血、其の二つとなき御生命を献げて、私の爲に祈つて下さる御子基督を顧み給へ。主よ、こ

の御子の權能ある祈を聽き容れて、救靈を全うするに必要なる聖寵を惠み給へ。私は弱くて、貧しくて、御身の助力なきに於ては、一つの善も行ひ得ず、一つの惡も避け得ないのだから、願望私を憐み罪の宥恕と、終を全うする聖寵とを與へ給へ。

主よ、私は耶蘇の御功德と其御祈とによつて願ひ奉る、何卒私が己を識り、主を一心に愛し、德の途に愈々遠く進んで、終には立派な聖人ともなるを得せしめ給へ。

異端、異教の人々は眞の道に歸依り、罪人は悔い悛め、聖會は益々榮ゑに榮ゑて、四海波穩かに人々皆な、主の平安を樂むを得せしめ給へ。

煉獄に苦ひ靈魂等をも憐み給へ。このミサの功德によつて、彼の苦しき獄舍も、全く空虛となるに至らしめ給へ。

終に世の人を殘らず憐みて、この哀れ儚き世界をも、何時しか麗はしき樂園と化らしめ、現世に於ては諸共に御身を敬ひ愛し、後、天國に於て、御身の光榮を千代に八千代に謳ふを得せしめ給へ。

疑はず、怖れず、自分の爲、父母兄弟の爲、妻子の爲、朋友の爲恩ある人、仇敵の爲にも、靈魂上にまれ、肉身上にまれ願ふべし。聖會が其難を免れて無事息災なる樣、日本帝國は益々盛ゑて皇室には豐けき天の祝福の降る樣、取分け未信者の歸正るやう祈らねばならぬ。自分の祈は既に耶蘇基督の禱でないか、如何して

聽容れられない事のあらう。

ミサが終つたら、暫く天主にミサを拜聽さして下さつた聖恩を感謝せよ。聖堂を出る時は、彼の刑吏等が胸を拊つてカルワリオ山を下つた時の如き感情を發すべし。

ミサ拜聽の方法は、大畧是である。今迄も恁う云ふ風にミサを拜聽して居たら、幾何の功德を積み得たであらうか。他見し、心を散らし、談話をし、笑つたり、居眠つたり、時には惡戲をして他の信心を妨げたり等して、益を得る所か却て損を招いたこと幾何であるか知れぬ。然し過ぎたことは何ぼう口惜がつても、所詮追附かない。たゞ將來を戒めるより外ないのである。

勞働

一、勞働は天主の命である、

天主がアダムとエワを樂園に置き給ふたのは遊んで暮させる爲でなく、勞働かせる爲であつた。勞働は實に人の本分である。人は暫くでも勞働を忘れてはならぬ。

勞働には身体の勞働と、精神の勞働とある。何れも天主の尊前には優劣はない。たゞ其人〳〵の意向の如何によつて其價値は斷まるのである。高い聖い意向を以てすれば、如何に拙らぬ勞働でも高く聖くなり、卑い賤しい意向を以てすれば、如何に立派な勞働でも卑う、賤しうなつて了ふ。

悲しい哉、世には働いて〳〵、身も心も働き潰して了つても、ろれで天國を儲け得ない人が多い。世間的意向しか持たない、賃錢しか考へないで、『天主の爲にしよう』とか、『天主に献げて爲よう』とか云ふ觀念は一つもないものだから、少しの金錢でも手に握ればろれで早う滿足して了つて、仰いで天を眺めようなんて夢にも思はないからである。彼等は實に、主基督の曰うた如く、現世で、もう其報酬を得て了つて、天國には少しも遺さないのである。

たゞひ口を養ふ爲に働くにせよ、身を富まし、家を豊にする爲に働くにせよ、眼を少し高く上げて天を眺めたら、自分の勞働に限りなき價値あらしむるのは易いことである。たゞ天主に向つて『主よ

此勞働は御身のために献げたい、御意を喜ばすが爲に、思召に從ふが爲に、天國を贏ち得んが爲に献げたい』と言つたばかりでも足りる。

然れば何事を爲るにも始めぬ前に先づ、『天主の光榮の爲に』と云ふ意向を定め、聖母の汚なき御手を以て之を天主に献げ、天使祝詞の一度なりとも責めて心の中に誦へるが可い。聖人等は、如何なる業でも天使祝詞を以て始め、天使祝詞を以て終られたのである。働く中にも、屢々イエズス、マリアを思はねばならぬ、『聖母が此業を爲し給ふと云ふなら、如何に給ふであらうか』、『主耶蘇が斯る場合に臨み給ふとすれば、如何に働き給ふであらうか』等想ひながら

心の中にかく祈るべし。

『自分はマリアと共に此業に取掛つた、マリアと共に之を終りたい……自分は耶蘇を喜ばせたい、マリアの聖心に適ひたい……マリアの御手を以て此業を天主に献げ奉る……耶蘇とマリアと共にさへ居たら、疲勞も何ぞ厭ふに足らん、退屈も何ぞ恐るゝに足らん』。

二、勞働は罪の償である、

『汝額に汗してパンを求めよ』。勞働は實にアダムの子孫に課せられた償である。人は如何なる境遇にあつても、之を辞つてはならぬ。『其勞働は卑しい、其業は恥かしい、身分に合はない』なんて思ふ人は、到底眞正の基督信者の精神を有つた人とは云へぬ。視よ

聖人等の中には其の貴い位を棄て、貧しい活計を爲し、賤しい業をされた人が幾ほど多いか知れぬ。殊に主耶蘇の寶鑑を仰視よ、身は天地の大王でありながら、聖マリアの爲、聖ヨゼフの爲、自ら荒い勞働を爲し、額に汗を滴してパンを求められたでないか。

勞働は償であるとすれば、之を以て今迄の罪も償はれ、天主の憐も得られる。其勞働が困難であれば有るほど、其償は價値があり、天主の裁もられ丈け緩易うなる譯である。之に反して、一生涯遊び暮して、体の汗も、心の疲勞も天主に献げたこともない人は、審判の曉に至つて如何な恐ろしい目を見ねばなるまいか。

三、勞働は救靈の爲に極めて肝要である、

勞働は人に罪を避け善を行はしむる。人は働いて居る間は、想像などが自由に飛び廻つて、不良ぬ事を考へる暇がない。心の門も塞つて、守護の天使を悲しませる樣な拙らぬ觀念が這入る隙がなくなる。

悪魔は盗人と同じく、居睡つて居る人を付狙ふものであるから、常にセッセと働く人には近づき得ない。

何一つ爲ずに、ブラリ〳〵と遊んで居るより危險い事はない。昔から閑人が善人であつた覺もなければ、怠惰者で品行の端正しかつた例もない。馬は始終乘り週はさなければ、少しでも遊ばして置いたら直に暴れ出す。人も同じだ、五官だの、想像だの云ふものは、

始終働かして働かして働かさなければ、必つと暴れ出して取抑へ難くなる。

其上、人には何か趣味がなくてはならぬ。働くのに趣味を有たぬ日には、是非なく他に趣味を求めようとする……遊ぶ、喋べる、演劇、寄席などに出掛ける、心の中は全で御留守になつて了ふ、果は何うなるか推して知られよう。

ダビドが軍を率ゐて、東を防ぎ、西に戰つて居る間は實に天主の聖意に適つた聖人であつた。敵を征服へて、靜に平安を樂む時になつたら、怖ろしい大罪を犯した。サロモン王も、天主堂建築の爲に夜晝、奔走つて働いて居る頃は、其德と云ひ、其智能と云ひ、世界

を驚かして居たが、工事が終つて、勞働がなくなつたら、馬鹿〳〵しい罪に落ちた。

だから、勞働は常に『德の保護者』と曰はれる。實に勞働は情慾を鎭め、心を紛らして惡事を考へる餘裕を與へない、退屈をさせず、日の長いのに困ると云ふ憂をなくして呉れる。故に、父母から勞働の眞味を覺ゑさして貰つた子女は、百万の寶を讓つて戴いたのより か感謝すべきである。

斯の如く、勞働は天主の命でもあり、罪の償でもあり、救靈の爲に極めて肝要でもあるから、人は世に在る間は、皆なろれ〳〵に働いて、天國の終りなき休息を待たねばならぬ。

食事、

一、食事に就て何を避くべきか、

『汝等食ぶも、飲むも、總て神の光榮の爲にせよ』と聖ポーロは曰つたが、世には、主の光榮の爲に飲食するものは殆ど稀で、飲食に由て主を辱めるものばかりである。腹だの、口だのを神樣として拜んで居るものさへ尠くはない、嘆かはしい次第である。

食事に就て、避くべき点は五つある。

一、時でないのに食べる。

二、『在合はする物を食せよ』と云ふ主の聖訓に反して、矢鱈に珍味を貪ぼる。

三、牛の如に飲み、馬の如に食つて、少しも節制へる道を知らない。

四、餘り急いで、ガツ〳〵食べる。

五、餘り飲食に耽つて、唯たそればかりを樂とする。

是等は基督信者でなくても、苟くも人たる以上は誰しも避けねばならぬ所である。人は生きるが爲に飲食するので、決して飲食するが爲に活きてるのではない。況して基督信者たるものは、右樣の過失に陷つてならないのみならず、平生世の貧困者を憐み、時に自分の食は多少減らしても、彼等の干からびた腹を潤してやらねばならぬ。責めては殘飯でも丁寧にかき集めて、彼等の口を糊らしてやる心掛があつて欲しいものである。

二、食事の時は何を守るべきか、

『膳は祭壇と思へ』と云つた人があるが、

一、祭壇の前では常に祈禱をする。されば食事の前後には、必ず祈禱を怠つてならぬ。公に出來がたい場合には、責めて心の中で誦ふべし。出來れば家内一同、聲を揃てへ誦へるが可い。幼い兒に唱へさして、父兄が應へるやうにするのは、最も嘉すべき習慣であらうと思ふ。

食事中は、聖母が御子耶蘇を抱いて、自分の側に坐り、一緒に食べ給ふと想像せよ、如何な擧動をなし、如何な事を物語り、如何に食べ給ふかを想像して、之に則るやう務むべし。

二、祭壇の上では犧牲が献げられる、基督信者たるものは、此祭壇の上で自分の食慾を屠つて献げねばならぬ。食慾を抑へるは完徳に入るの第一歩である。主基督は荒野に引籠つて、四十日間も斷食された。十字架の上で焼くが如き渴を覺えられた時すらも、一滴の冷水でも口にすること出來なかつた。聖人等は此の聖鑑に倣はうと努められたから、一人として飽まで食ひ、飽まで飲んだ方はない。聖レオナルドは、御初の果實が出ると初穗として必ず天主に献げ、手を掛けなかつたと云ふことである。聖アロイジオは、聖体拜領の前晩には、守護の天使の分として、味さうなのを少しばかり遺し置くのが例でおつた。聖ヨハネ、ベルクマンは、食事に就て自分の心掛を

記じて、次の如く曰つて居る、『主耶蘇が、弟子等と共に食事し給ふと想像して、其行儀に見習ふ。或は主が苦膽を嘗められたことを想ひ浮べる。時には、主が嬰兒となつて、自分の心に生れては、自分に乳を求め給ふと想像し、美味いのを割いて、之を養ひ奉る』と。

斯う云ふ風に、少し位節べたとて、健康を害することもなければ、人にも格別氣つかれず、自分の慾には十分に打勝ち、天の限りなき報酬を受けること出來るのである。

それでも出來なければ、責めて鹹いの、水臭いの、焼過ぎたのと呟かず、たゞ饌められる物を食せよ。

嘗て聖ドミニコ會の一童貞、熱病に罹り、死に垂んとして居る時、

一杯の冷水をと願つた。院長の童貞が『水は飲まして上げよう、然し今の渇を天主に献げて、煉獄の苦罰を軽めたら如何ぢや』と云へば、病人は快く首肯いたが、間もなく目を瞑つて歸らぬ旅に就いた。暫くして彼童貞猛火に包まれながら院長に現はれて曰ふやう、『一杯の冷水を天主に對して犧げさして下さつた事は、如何に私の益になつたか知れませぬ。今恁う云ふ猛しい火に包まれて居ますけれども、彼の犧げた一杯の冷水を天使が持つて來て、始終私を冷やして下さるのです……』

實際談であるか、偶話であるか確には分らぬ、兎も角も有益な訓が含まれて居る。即ち祈禱と節制とを以て、食事を聖くすると、煉

獄の罰を輕められ、却て天の大なる幸福を享けるの基となるは疑を容れざる所である。

談話、其一（潔白を害ふ）

『人若し言によりて愆つことなくば、是れ完全なる人なり』と使徒聖ヤコブは曰つたが、實に口と云ふものは、益にもなるが、また大〳〵害にもなる。殊に潔白の德が口の爲に蒙る害と云つたら、それは〳〵一通りでない。されば眞正の基督信者たるものは、苟にも不潔な談を耳に入れないやう、況して自分が左樣な話をしないやう、平生、決心の臍を固めて居なければならぬ。

一、不潔な談を耳に入れな、

不潔な、淫猥がはしい談には、一切耳の戸を固く締め、心の門を緊しく塞がねばならぬ。一旦戸を開けて之を内に入れたものなら、心は如何に荒らされるか知れない。

茲に一個の青年があるとする。初めは信心でもあり、天使の樣に潔白でもあり、何人からでも隨分末頼もしく思はれて居たので、淫猥な語が始めて耳に入つた時は、忽ち顏を赤めて戰慄した位でおつた。然るに幾度も〳〵同じ樣な談を聽くに隨つて、終には耳も習れ心も慣れて、格別怖ろしうも感じなくなる、昨日まで顏を赤めた語も、今日は笑つて聽く、今日まで戰慄して居た話が、明日はもう樂しう耳に響く、自分も話す、考へる、望むやうになる。

斯うなつては、其青年の言語、擧動がスツクリ變つて了ふ。今迄は熱心で、祈禱も善くすれば、秘蹟も善く拜領つて居たものが、今は天主の尊前に拜跪くのが何となく恐ろしい思がして、祈禱も怠れば、秘蹟にも遠かる。

今迄は親にも孝行し、人にも親切であつたが、今は我儘氣儘に振舞つて、人を人とも思はぬ、親の側に居るのも面白くない、内を出たい、騷がしい場所が戀しいと云ふやうになる。

今迄は、清くて、美しい其心は、愛らしい靨にも現はれ、涼しい眼元にも浮んで居たが、今は其額は曇り其眼は濁り、其笑も態とらしく見える。

僅かの談話より、斯る恐ろしい害が起つたかと思へば、實に慎んだ上にも慎まなければならぬものは、不潔な談話である。

されば、『自分は右樣の話を聽いても、心に留めないから氣遣ない』なんて假にも言つてならぬ。心に止めようが、止めまいが、毒は何時でも毒である。毒を飲みながら心に止めないから害はないと濟し込んで居ても、死んだら何うする。

又決して、「格別甚い話でない」と言つてもならぬ、邪淫の事には僅少と云ふものはない。非常に滑かい路である、一歩踏み外せば、底も知られぬ穴の中だと覺悟せねばならぬ。『千丈の堤ですら、蟻の穴から壞れる』、『小を慎まねば、大が破れる』と昔の人も曰つた

でないか。

もしや身分、職業の爲に、腐つた人中に居て、始終、不潔な談話を聽かねばならぬと云ふ人は、實に氣の毒の至である。然し力を落すには及ばぬ。飽まで戰はうと云ふ決心を以て、天主に依賴みさへすれば、天主は必ず聖寵を與へて下さる。天主は決して、防ぎ兼ねるほどの誘惑には何人にしても遇はせ給はぬ。斯る場合には、仰いで天を眺め、或は胸に掛けて居る十字架を抑へつゝ『耶蘇、マリア』と心の中に叫ぶが可い。縱し不潔な談話が耳に響いても、心の中にまで這入る氣遣はあるまい。

二、不潔な談話を自分で爲な、

不潔な談話は、耳に入れてさへならぬと云ふなら、況して自分で語つてもならぬ。『ナニ笑草に言ふのだもの』と平氣で居る人があるが、其の笑草に言つた一語が、聽く人の心に邪慾の火を煽つて、如何な大害を仕出かすかも知れない。

カインが弟のアベルを殺した時、天主は之を責めて、『カイン、カイン、何故汝は弟を殺した　汝の弟の血が我に向つて叫ぶでないか』と曰うた。不潔な談話を人の前にするのは、カインよりも重い罪を犯すのである。カインは、弟の身躰を殺した丈けだが、今の人は兄弟の靈魂を殺すのである。其の殺された靈魂が如何して天に向つて叫ばないだらう。況んや其う云ふ談話を無邪氣な小兒の前

に話して罪の道を敎へるが如きは、憎みても足りない大罪であらう。主基督も曰うた、『此の最と小さ者の一人を躓かする、人は、挽臼を頸にかけられて、海の深に沈めらるゝころ彼に益あるなれ』と。

不潔な談話の害は斯く迄恐るべきものである。されば基督信者たるものは、啻に右樣の談話を自分でしないのみならず、成るだけ、人にも爲せない樣つとめ、取分け小兒の身の上を保護して、其の美しい白百合の蕾が、惡少年の手に拐ぎ取られぬ樣、注意してやらねばならぬ。

談話、其二（友愛を害ふ）

饒舌は完德の大敵である。口を愼まない基督信者は、決して完全

の人となる事は出來ない、友愛を害ぶやうな饒舌は猶更ら然である。

『世に誹謗と云ふものが無くなつたら、罪の原因は大部分消滅せるであらう』と聖フランシスコ、サレジオが曰はれたのは、決して過言ではない。

誹謗は人の最も陷り易い過失で、二人三人集ると、もう直に人の批評をし、蔭口を云ひ、内密な不足まで素破抜き、針の樣な過失でも棒になして語りながら、當人は格別の罪ではないもの、樣に濟し込んで居るのである。然し誹謗の恐るべき結果に少しく眼を開いたならば、此罪の如何に憎むべきであるか悟られぬ筈はない。

一、誹謗の結果、

誹謗は、平穏な家庭に思はぬ波風を立たせ、親しい友の間を割き、憎惡、不和の種子を播きつけるは言ふ迄もないが、他に又人の最も貴重んずる名譽を失はせるのである。

聖ポーロは、天國に入ること出來ない罪人の種類を數へあげて、「酒に醉ふものは偶像を拜むもの、姦淫を犯すもの、誹るもの、盜人も天國に入るを得ず」と曰つた、何故誹るものを盜人の前に置いた。之れ名譽は金錢よりも貴く、名譽を傷ける罪は、金錢を盜むのより重いからである。

名譽は實に德ある人の額を飾る金冠である。勤勉、正直、勇氣の諸德に與へらるゝ最も美しい報酬である。金錢よりも貴く、自由よ

りも重んずべきである。斯う云ふ貴重い寶を失はせるのだと思へば誹謗は決して輕い罪とは云はれまい。

して金錢ならば直に陪償が出來るが、名譽はナカ〳〵然うでない。花片が一旦地に落ちて、人の泥足に踏みにじられてから、もう再び元の梢に上されるものでない。

二、談話に就ての注意、

一、されば基督信者たるものは、平生自分の舌を堅く戒め、人を是非する代りに己を是非し、人の目の塵を見咎める代りに、自分の目の梁を取除ける樣、努めねばならぬ。

二、人を誹謗りたい心の發る毎に、主耶蘇が、啖、唾なぞ、顏一面

に吐きかけられ、見るさへ汚らはしくなつて居られるのを眺め、自分は此上にも、主の御顏に向つて、誹謗の唾を吐かんとするか、寧ろ彼のペロニカと共に、之を拭き取るやう工夫すべきでないかと、深く自ら戒めねばならぬ。

三、出來るだけ誹謗を防止めねばならぬ、誹るものが下輩であれば、嚴しう之を禁じて防止めさせねばならぬ。自分の子女なり、僕婢なりが、自分の前で他人の不足を物語り、讒言、誹謗を爲すのを、決して許し置いてはならぬ。

四、誹謗るものが同輩であれば、親切に友愛の道を說いて之を中止めさすことが出來る。巧に其談話を紛らして、他に移すことも出來

る。これでも猶ほ聽かなければ少しは聲を荒らげても、之を遮るが可い。

五、長上であれば少し面倒である。斯る時は、顏色を正しうし、眞面目腐つて、左樣な話を聽くのは厭だと云ふ意を表せば、誹謗の刀は自づと鞘に收まる。「北風が雨を吹き拂ふが如く、皺めた額は誹謗を止めさす」と聖書にもあるでないか。

六、人の不足が耳に入つても、容易に之を他に漏らしてはならぬ。況んや、誹謗られた人に之を訴へるが如きは、夫れこそ惡魔の手先となつて、不和を種蒔くものである。夢々斯る過失に陷らないやう、注意の上にも注意を加へねばならぬ。

娯樂

一、無害の娯樂、

使徒聖ヨハネが一日何とか云ふ鳥を玩んで居ると、獵夫が丁度通りかゝつて、「聖人でも斯樣に時を潰して可いものだらうか」と小首を傾けて居るから、聖人は獵夫を顧みて、「卿は何時でも弓は張り詰めて置きますか」と尋ねた。「否」獵夫は答へて曰ふ、「何時でも張り詰めて置いたら、屈つて役に立ちませぬから、不斷は弦を外して置きます」、聖人はすかさず「ソンナラ私も時として張り詰めた心を弛める必要があります」と申された。

然らば娯樂其物は決して惡いものでもなければ、無益なものでも

ない、時としては必要缺ぐべからざるものである。世に娯樂が無かつたら、人は到底生きて行かれるものでない。

一日セッセと働いて、夕方一同爐を圍んで、面白い談話をし、罪のない遊戯をして樂むのに何の惡いことがあらう。

日曜日等に、手に手を取つて野山に出かけたり、親族朋友を訪れて、久振りに蜜の樣な談話を交へたりするのに、何の危いことがあらう。

春は花に戯れ、秋は月に嘯き、耳新らしき音樂を聽き、面白う、可笑しう綴られた詩文を誦讀むのも、亦時としては無益ではあるまい。

聖人等と雖も、花を眺め、月を賞め、小兒の如く嬉々として笑ひ興じ、無邪氣な猾稽なゞとして樂まれたのである。聖ヒリッポ、ネリオが「天主は快活な靈魂を愛し給ふ」と曰つたのは、決して過言ではない。

人によつては、笑顔一つ作らずに、始終眞面目くさつて居なければ、信心は出來ないもの〻樣に考へて居るやうだが、ろれこそ大きな間違である。罪のない娯樂で、身分に似合つて居るのなら、過ぎさへしなければ、決して惡いことはない、餘り眞目面腐つて、顰めてばかり居ると、天主に奉仕へるには、高い聲も出されぬ、始終泣いて居なければならぬものと世の人に思はせて、益々信心に遠から

して了ふ。天主は決して、左樣な泣面を好きなさらぬ。「汝等常に主に於て喜べ、重ねて言ふ喜べ」と聖ポーロも曰つたでないか。

娯樂も之を天主に献げて、信德を以て遣ると、神聖くなつて、天國の報酬を受けるの基ともなるものである。嘗て聖アロイジオが二三の友と遊戯をやつて居ると、誰かゞ突然「今十五分の後に死ぬと云ふなら、各位は如何しますか」と言ひ出した。司祭の許に驅け附けて告白しよう」と云ふのもあれば、「聖堂に跪いて、愛情を發しつゝ、死ぬ時を俟たう」と云ふのもあり、皆な思ひ〳〵に自分の考を述べるのに、アロイジオだけが何とも言はないから、「卿は何うしますか」と一人が尋ねた。聖人は莞爾と笑つて、私は續いて遊戯を

やります、善う考へて御覽、我々の爲に望ましい事は、天主の聖旨を行ひつゝ死ぬることではありませんか。然るに今遊戯をするのが天主の聖旨である以上は、續いて遊戯をやるより善いことはありますまい」と答へられた。成るほど尤もな道理である。

然じ娯樂は、飲食、睡眠等と同じく、度を過してはならぬ。如何に娯樂だつて、朝から晩まで之に溺れ込んで、徒らに貴重な時間を費すのは、もう娯樂ではなく、仕事である。慰勞どころか、却て精神を疲らし、身躰を弱らすばかりで何の益もない。況んや其爲に、祈禱を怠り、日曜日の説教、公教要理の稽古、聖体降福祭などまで缺がすやうでは、益のないのみか、害ばかりだと云はねばなるまい。

二、危險な娯樂

娯樂は皆な善いものばかりはない、中には隨分危險なのがある。讀書であらうが、觀物であらうが、詠歌でも、談話でも、壞れ易い潔白の寶を、聊かでも傷けるやうなのは、惡しい娯樂である。たとひ絶對的に惡しいと言ふほどでなくても、餘りに數重り、餘りに長らく續け、又餘りに熱心になると、大きな過失に陷る恐あるものは、危險な娯樂である。

罪の機會となる娯樂の惡しいことは、云ふ迄もない。好んで斷崖の上に行くものは、終には滑り落ちるものだ。で、青年は、すべて父母の行かない所には、自分も行かない事にする、行くとすれば、

必ず父母と共にするか、或は責めて父母の許可を受けてから行くことにするかせねばならぬ。

初秋の涼しい夕、ヒヤリとした風がそよ〳〵として、ランプの光が徐かに瞬すると云ふ頃は、蝶などが光を追つて室内に飛び込み、物珍らしげに、ランプの周圍をクル〳〵飛び廻つて戯れて居るが、不圖した機に羽を燒かれて、哀れな最期を遂げるのが多い。輕卒で美しい、樂しいものを頻りに追つて廻る青年は、此の愚かな蝶ではあるまいか。何でも視よう、何でも聽かう、如何な書でも讀みたい如何な演劇でも觀たいと、猛火の周圍をクル〳〵飛び廻つて、終には、身も魂も燒き盡されて了ふと云ふは、自業自得とは云ふもの

よ、實に哀れな次第である。

兎に角、用心が大事である。

用心せよ、用心せよ、樂んでも淫ざる勿れ。娯樂は必要である。

けれども決して過ぎてはならぬ。過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しだ。

職務、其一（一般の心得）

一、職務を大切にせよ、

軍人は國家を保護し、司祭は信者を敎へ導き、父母は子女を育て子女は父母を扶ける等、人には皆なそれ〴〵に定まつた職務がある。

して各自の身分職務は、皆な天主の攝理から出たものであるから、之を忠實に盡しさへすれば、天主の聖意にも適ひ、澤山な功を立て

德を積むことも出來るのである。

執る職務には面白い事ばかりはない、隨分と厭な事もある。骨も折れる。然し厭だから、骨が折れるからとて職務を怠るやうでは、天國の報酬が何うして得られよう。「豐に蒔く人は亦豐に刈らん」と聖ポーロも曰はれたでないか。

世には自分の境遇に滿足する人は甚だ尠いで、多くは他人の身分家柄を羨んで、自分のより高くて、幸福だと思つて居るのであるが然し善う考へて見るが可い。

人の身分家柄が高いと云つて何の羨むに足らう。天主の尊前には高いものなしである。天に輝く月日でも、地に匍ふ虫けらより高い

とは云はれぬ。金殿玉楼に住ふ帝王も、橋の下に眠る乞食より貴しとする譯はない。孰れも天主の御手に造られたものである。土より出て土に歸るべき筈のものである。

又自分の職務が卑しいと云つて溢すにも及ばぬ。天主の尊前には小いものもなければ、卑しいものもない。天主は我等の行爲の大さ小さを觀ずして、着眼點の高さ低さに注意しなさる。だから假令ひ一生の間、卑しい拙ちぬ事ばかりして居ても、仕樣一つでは、卓絶た、人目を驚かす樣な業をしたのよりか、天主の眼には猶ほ價値あることもある。

主耶蘇こそ何よりの龜鑑である。三十三年の御生涯の中に、三十

年と云ふものは、何をして居られた。身は全能の天主でありながら聖母マリアに家事の手傳を爲し、或は聖ヨゼフを扶けて、鑿や鉋を握るのを不似合だとも思ひ給はなかつたでないか。

斯る御手本を仰視ながら、猶も自分の身分や、職業を恥ぢるやうでは、何うして眞正の基督信者と云はれよう。

二、職務を忠實に盡せ、

一、職務を忠實に盡すのは、完德の道であるのに、それを悟らぬ人が世にはナカ〳〵多いやうである。「わゝ私が童貞院にでも這入れたものなら！斯子の世話を燒いて呉れる必要がなかつたら！斯父母を養ふ義務がないのだつたら！信心に身を委ねて見ようけれども……

斯樣に忙しくては、何うすることも出來ない」など溢して、自分の職務は棚にあげて置きながら。徒らに空想を夢みて居るのである。何と云ふ考違であらう。天主が人を裁き給ふ時は「汝は童貞であつたら、何をする筈であつたか」とか「最と樂な身分であつたら、如何に信心する筈であつたか」などは、決して尋ね給ふまい。唯だ「斯う云ふ身分で、斯う云ふ困難に遭遇して居たが、然し斯ほどの聖寵を與へて置いたに、如何な事をしたか」と問ひ給ふのみであらう。

だから何はさし措いて先づ盡さねばならぬのは、自分の職務である。子の親でありながら、其子の世話は放かりかして、朝から晩まで聖堂に坐り込んで祈禱ばかりして居るやら、自分の負つて居る債

務は償はずして、財産は殘らず慈善事業に投げやつて了ふやらするのには、感心は出來ない。祈禱は善い事である、慈善は努めて行はねばならぬ、然し我子の世話は祈禱よりも大切で、債務を償ふのは慈善よりも先にすべきではないか。

すべて何人にしても、長い間、信心の書を讀んだり、祈禱をしたりして、其爲に自分の職務を怠るのは賞めた事でない。恁う云つても、信心の勤行を怠つても善いと云ふのではない。祈禱は靈魂の生命である、信心の書は靈魂に極く〳〵大切な養料である、成るべく時間を多く之が爲に費すやうにしたいものである。然し職務はまだ夫れよりも大切である、何事たりとも之に代へる事は出來ないと云

ふことを忘れてはならぬ。

人は自分の職務の前には、何時でも「アメン」と叫ぶだけの勇氣があつて欲しい。「アメン、主よ、御身の置いて下さつた境遇に私は安じ奉る。又斯境遇にあつて凌がねばならぬ苦痛も、盡さねばならぬ職務も、快く引受け奉る。私は御身の望み給ふ所を、望み給ふ儘に、望み給ふが故に遂げたい。主よ、私が自分で望む所の道によらず、御身の開けて下さつた路に由つて、私を天國の彼岸に導き給へ。其時ころ私は明に御攝理の難有さを覺るであらう。今はたとひ小な仕事をし、拙らぬ職業を務めて居ても、後日天國に於て、大きな、目立つた、立派な事を司ること出來たら、如何に嬉れしい

事であらう」。

恁う云ふ心掛でさへ居たら、如何に困難な境遇に立ち、如何に面倒な職務を背負はされても、露ばかりも、天を怨んだり、人を咎めたり、自暴を起したりする氣遣はないであらう。

職務、其二(家庭に於ける子女の心得)

一、子女は其愛嬌を以て家庭を幸福ならしめよ、

ドンヨリと灰色に曇つた冬の寒天に、太陽が突然雲を破つて、其の温かい顔をヌッとつき出して、優しい光線と、慈母の手で撫でるやうな熱とを世界に送つて呉れると、氷は融けるし、濕つぽい空氣は乾くし、草木までが愁の眉を開いて、ホット一息つくかと思はれ

るばかりである。

家庭に於ける子女は、實に此太陽である。家庭を喜ばせ、活氣を入れ、陰鬱な空氣を拂ひ除けて、家庭をして和氣靄々たる地上の樂園たらしめるのは、實に子女の愛嬌一つである。

愛嬌があれは、諫められようが、戒められようが、折檻されようが、必ず喜んで受ける。

父母にも、心より飛び立つて從ふ。何時も父母を敬ひ愛して、其言であれ、行であれ、嘲笑つたり、口眞似したり、手眞似したり、することはない。

兄弟姉妹とも仲善くし、親切に敎へ導き、嬉しい事も悲しい事も

苦も樂も共々にして行く。

他人の不足、過失も善く耐へる。嫌な言を謂はれても、癪に障る事を爲れても、言譯をしてやる、敎してやる、あら〳〵しい、氣障になるやうな語一つ口から出しはしない。

恁う云ふ風に、子女たるものは、何事も主耶蘇に對して善く耐へ忍び、何人に向つても、愛嬌をタップリ振り撒いて、自分の氣の短いのは長くし、あら〳〵しいのは温和くし、噪がしいのは大人しくして自分の家庭に、長閑な春の日が、ポカ〳〵と照り込むやうにしなければならぬ。

二、子女は家庭に善德の花を匂はせよ、

子女たるものが皆な自分の責任を覺つて、自分は基督信者である、自分の家庭には立派な基督教的善德が馨つて居なければならぬ、其善德の花を植附けるのも、馨らすのも、自分の役目だと深く自ら信じて、平生其處に力を盡したら、必つと美しい、幸福な家庭が出來るに相違ないのである。

それが爲には聲を揚げて說諭することも要らねば、疊を叩いて諫めるにも及ばぬ。諫めたり、說諭したりすると、却て人が厭に思つて聽かなくなる。寧ろ守護の天使が、聲も立てず、目にも視ずに、人にも知れないで居ながら何人にでも善を勸め、惡を避けさして下さるが如く、子女も、自分の好範と、祈禱とを以て、家庭の守護の

天使と爲れるのである。

一、子女は好範を以て守護の天使となれる。

毎日々々、行を改め、德を磨き、今日は昨日より、明日は今日より益々善良い子になり、愈々立派な基督信者となつたら、其影響は必ず家庭に及んで來る。

自分の言ふこと、爲ること、すべて謙遜に、潔白に、信仰だの、耐忍だの、從順だの、親切、温和だの、すべて基督信者の行ふべき善德の花が自分の胸の中に咲き溢れて居たならば、其の床しい馨は必ず四邊に散り匂うて、父母でも、兄弟でも、隣近所までが、自然と其れに化せられて、何とも云ふに云はれぬ空氣が家庭に一ぱい

漲るやうになるに違ひない。

二、子女は祈禱を以ても守護の天使となれる。

父母の爲に祈るのは子女の義務である。浮世の交際の爲に其信仰の火が弱つて居る、時としては全く消え失せて居る父もあらう。家業の忙さにトント靈魂上の事を忘れて了つた母もあらう。斯る父母の爲に子女たるものは其の美しい眼を天に擧げ、其の愛らしい手を交み合せて祈らねばならぬ。たとひ父母が如何に罪惡に固つて居られても夢にも其改心を失望してはならぬ。天國とは何ぞ、地獄とは如何なる所ぞ、子女の祈禱は如何に天主の聖心を感動させる力あるものぞと思つたら、如何しても一心不亂となつて主耶蘇の御憐

に賴り靠らずに居られまい。殊に斷食をし、身を苦めて熱い涙を揮つて献げる祈禱には、如何ほど頑固な罪人でも、角を折られずに居ると云ふことは出來ないのである。

公審判の曉になれば、我子の熱心なる祈禱や、斷食やの爲に、悔い改めて、天國に昇れる身の上となられたことを悟つて、天主に感謝する父母が幾何多いか知れないだらう。

要するに父母は子女を愛し、養ひ、訓ふる責任を負つて居るから子女も亦父母に善く孝行し、父母の好龜鑑となり、父母の爲に熱心に祈つて上げる義務があると云ふ事を朝夕決して忘れてはならぬ。

一、靈的讀書の利益

靈的讀書と云ふは、靈生を養ひ、温めんが爲に、聖書とか、聖人傳とか、其他すべて靈生の助となるべき書籍を讀むことであるが、是は基督信者の苟にすべからざる要務の一つである。

多の人は、天に昇るの道に就ては、情ないほど不案内である。現世の事には非常に老成た人でも、靈魂上の事と來たら、三歳童よりも淺間しい。何を避け、何を守り、何の道を進んだら可いのやら、一向分らない。さらばと云つて、朝夕、親切な靈父に敎へて貰ひ、賢明い朋友に指圖して戴くと云ふことも出來ない。

所が、信心の書は、其親切な靈父なり、其の賢明い朋友なりの代

となつて、過失があれば戒めて呉れる、心が弱れば引立て呉れる、眠りかけると搖り起し、冷却かゝると温めて呉れる。實に何よりも確實な相談相手、何よりも安全な道案内である。

實際是等の書籍を讀むと、心に自然と善い思が萌し、美しい望が發つて來る。主基督の聖い訓言を讀み、聖人等の立派な行狀を觀ては、誰だつて自分も其訓言を行ひたいもの其行狀に倣ひたいものと云ふ念が浮んで來ないものはあるまい。隨つて默想するにも、ミサを拜聽するにも、聖体を拜領するにも、容易う天主の事が思ひ出されるので、無闇に心の散り亂れる憂がない。何處に居ても何をするにも、氣が挫けようとする時、其からぬ念が萌して來る時、平

生讀んで、覺て居る主の聖訓、聖人等の御戒が、ヒラリと眼前に立ち顯はれるから、如何しても邪道に踏み迷ふことが出來なくなる。

終に靈的讀書によつて、心の照され、强められること〻云つたら夥しい。ろれも其筈である、祈禱や、默想の時は人が天主に對して御話するのであるが、靈的讀書に於ては天主が人に向つて話して下さるのである。聖アムボロシオも曰はれた如く、祈禱の時には、天主が人の聲を聽いて下さるが、讀書の時は、人が天主の聖語を承るのである。謂はゞ、救靈の道を敎へんが爲に、人に送つて下さつた天主の玉簡を拜讀するのであるから、如何ほど益になるかは、言はず

して明であらう。

昔から、靈的讀書によつて聖人となられた方は少くない。例へば聖アウグスチンは、聖ポーロの書簡を讀んで改心し、聖女テレジアは、聖ヒエロニモの書によつて其眠を醒し、聖イグナシオは、退屈まぎれに聖人傳を繙いて自分も聖人となられた。

嘗て佛國に一人のハイカラ書生が居た。無宗敎主義の敎育を受けた結果、終に全く宗敎を打棄て了つたので、母が非常に心配して一日『基督の模範』と云ふ書をソット子息の机上にあげて置いた。然し一行でも讀んで見ようとはせずに、一枚づゝ引破つて、剃刀を拭つて居たが、如何した都合でか、或日、剃刀を拭つた後で、何氣

なしに一行、二行讀んで見て、非常に感じ、これからと云ふものは全く別な人間に成り變つたと云ふことである。

恁う云ふ利益があるのだから、毎日、少し宛でも靈的讀書をやつて見るやう、毎日出來なければ、責めて、日曜日や、祝日になりとも怠らぬ樣、何人にでも勸めたいものである。

殊に父母たるものは、毎晩、子女を膝下に集めて、聖人傳や、舊新約物語やうなものを、或は自分で讀んで聽かせ、或は子女に讀ませして之を聽き、子女が通曉りされぬ所は、自分で之を說明して、其幼心に善德の種子を播きつけてやると云ふことを怠つてはならぬ。

二、靈的讀書法

信心の書は、如何して讀んでも、必ず無益にはならないが、然し多くの益を收らうと思へば、讀書前、讀書中、讀書後に、これ〳〵方法を守らなければならぬ。

一、（讀書前）。靈的讀書は一種の祈禱である。「祈禱の前には汝の心を整へよ」と聖書にもあるから、書を開く前に、先づ天主の尊前に居ると云ふことを考へ、謹んで他念を避け、天主の聖言を聽くことだけ、一心に望まねばならぬ。

靈的讀書をするのは、物を學び。事を識る爲でない、身を修める爲である。だから、學者にならう、博識にならうなんて思はずに、唯だ〳〵救靈の道を覺りたい、天主を愛する方法を求めたい、己を

識り、身を輕んじて、益々謙遜になりたいと云ふこと丈けを意向としなければならぬ。

終に、靈的讀書によつて、益を獲るのと獲らないのは、天主の聖寵次第である。天主が聖寵を降して、我等の智を照し、意を動し、情を温めて下さらなくては、たとひ萬卷の書を讀んでも、何の益もないのだから、靈的讀書の前には、必ず天主の聖寵を熱心に祈らねばならぬ。

二、(讀書中)。徐々讀むべし。食物を咀嚼もせずに、スル〳〵と丸呑にしては、身體に益ところか、却て害になることもある。讀書も然うだ、急いで走讀をしては、害こそなけれ、格別の益もないもの

である。だから讀んで行く中に、心の感動する個所に至らば、暫く書を閉ぢて之を玩味ふべし。蜜蜂を見ずや、蜜の多い花を見當ると幾度でも、飛び去り、飛び來つて、殘らず蜜を吸ひ盡さでは、他の花に移らないでないか。恁うして讀んだ一枚は、急いで走讀した一冊にも優るものである。

物飽きの心を抑へねばならぬ。今日は此を、明日は彼をと有つてるだけの書を讀んで見ようとするのは、尤も避くべきことである。いくら飽いても、一旦讀みかけた以上は、終迄讀み通すだけの決心がなくてはならぬ。

三、(讀書後)。讀んで了つてから、暫し心を天にあげて、今天主か

ら教はつたことを感謝して、之を實行ふ力を願ふべし。

讀んだ事に就て、一つ、二つ、何か善い決心をして、機會を捉つて之を實行ふやう心掛くべし。

讀む中に、特別に感じた所を、記憶に留めるか、或は手帳にでも一筆記し置くかすべし。

聖体訪問

一、聖体訪問の理由

聖堂に近い人は、なるべく毎日、夕方に、聖体訪問を爲すべし。

遠くて、或は忙しく、毎日態々聖堂に參詣し難い人でも、責めて聖堂の近傍を通る時に、一寸立寄るか、或は辛い事に出遇ひ、悲し

い目を見た時等に、聖体に駈けつけて、其御慰を求めることを忘れてはならぬ。

抑も主耶蘇は、人々を愛して、身は天地の君、萬物の主でありながら、わざ〳〵斯の涙の谷に降り、淺ましき人間となり、千難萬苦を凌ぎ、果ては其の二つとなき御生命を十字架の上に牲げ給うたのである。それでも猶ほ滿足し給はず、我等を遺し置いて孤兒とするに忍びないと思召して、聖体の秘蹟を定め、小なパンの形色の下に隱れて世の終迄も、我等と共に滯留り給ふ。主は實に人々と共に住ふのを、何よりの樂と思召し給ふのである。然らば我等の方でも、聖体を訪問て、暫くなりとも、主と共に居ようとするのは當然である

まいか。

茲に慈悲深い國王があつて、賤しい田舍人を殊の外愛して、彼等と共に住み、共に親しく物語りたいものだと思つて、態々姿を窶して田舍人となり、いぶせき片田舍に降つて住はれると云ふならば、村の人々は、幾程、勿體なく思つて、訪問にも往き、談話もして其大恩を感謝するであらう。

主耶蘇が天地の大王でありながら、其御威力を包み、其御威光を晦して、聖櫃の中に籠つて居なさるのは、ナカ〳〵ろれ位の御惠でない。ろれに人々は、如何して斯る大恩を難有しとも思はず、訪問にも往かず、互に睦しい談話を交へようともしないのであらう。

親を尋ね、朋友を訪問つて、嬉しい事も、悲しい事も、心に隔なく打語らふのは人情である。其爲には途の遠いのも厭はねば、時間の費ゐるのも惜しいものでない。今主耶蘇は、啻に天地の大王であらせらるゝのみならず、亦實に慈悲深き親である、二つとなき朋友である、何ぼう忙しくても、時としては訪問にも往き、慰めもし、慰められもすべき筈ではあるまいか。

所がナカ〳〵然うは行かぬ。朝寢、晝寢に費す時間はある、用もないのに家より家へと徘徊るいて、世間の噂をしたり、己が身の上を語つたり、人の内密を訐いたりして潰す餘裕はあるけれども、聖体の訪問をするが爲には、五六分の時間でもない。

僅かの金錢を儲けるが爲ならば、果敢ない名譽を漁るが爲ならば困難を困難ともせず、東に西にかけまはるが、此の慈愛厚き親を見舞ふが爲に、此の親切な朋友に挨拶するが爲に、一寸家を出る、僅か二三歩の途を枉げるさへしないでないか。或聖人が曰はれたことがある、「親しい友の軒前を通りながら、入つて挨拶しようともせず友と軒を並べて住居しながら、朝夕、物言ひ交さうともしないのは禮知る人と云はれやうか」と。然し世には、其樣な禮知らぬ人ばかりである、嘆かはしい次第ではないか。

フランシスコ、ザベリオ聖人は、終日布敎の爲に奔走つて、歸れば終夜、聖体の尊前に跪いて、茲に其疲を休め、新らしい力を養

つて居られた。

アルホンソ聖人は、幼き時より厚く聖体を愛して居られたので、聖体の尊前に出て、最愛の天主と物語し奉る時間は、瞬く間に過ぎるよと見ゆるのであつた。司祭となつてより、晝は幾たび其事務を差置き、夜は幾たび其眠を醒して、聖体の前に馳せ往かれたか知れぬ。司敎となられても毎日長らく聖堂に跪いて居られるのを見ぬ人ころは無かつた。冠を掛けて司敎の位を退かれてからは、毎日八時間以上も聖ミカエル堂に跪いたり、坐つたりして祈られるのであつたが、何時も熱心面に溢れ、時としては、心燃ね、情昂まりて、其の愛する御ものゝ方へ飛び立たん許りに、思はず知らず、「見

よや見よ、來りて見よ、如何に美しく在すよ、愛し奉れ、心の底より愛し奉れ」と叫んで居られた。晩年に及んでは、手を取つて强ひて引立てなければ、聖体の前を退き給ふことなく、散歩し給ふ時は、必ず聖体の在す聖堂を目的に家を出られたと云ふ事である。

二、聖体見舞の利益

現世は戰の場である、基督信者たるものは、始終救靈の敵に向つて花々しく戰はねばならぬ。一方には、自分の盡すべき義務はナカ〳〵面倒さうな顏付で立ち顯はれる。一方より情慾は、さも優しい姿で惡の方へ引ぱり込まうとする。精神は善を望んで逸れども、肉は弱くて、動もすれば邪道へ馳り出さうとする。力が大に必要で

あるが、サテ其力は聖櫃の中に在る。我等もし聖櫃の前にかけよつて、使徒等の如く、「主よ救ひ給へ、我等亡ぶ」と叫んだら、主はきつと力を貸して下さるであらう。

聖櫃の中には力ばかりでない、慰もある。現世は涙の谷であれば、人として苦痛のないものはあるまい。

父母兄弟に死なれて、死ぬやうに悲しいものもあらう。主も嘗て養父のヨゼフに先たれ、親しいラザルに死なれて袂を絞り給うたこともあつたのだから、斯る時には、主の尊前にかけ行いたら、主は必ず同情を寄せて下さらう、「善人の爲には、死は眞の死でない、却て幸福な生命に移るのである。後日天國で遭はれる、決して悲むに

及ばぬ」と曰うて、慰めて下さるであらう。

貧乏の意地悪い手に壓し附けられて苦む人もあらう。聖体の尊前に拜跪いたら、主は必ず慰めて曰ふであらう、「悲むには及ばぬ。唯だ基督信者らしく堪へ忍べ。云ふに云はれぬ幸福の世界が、後の世には備へられてあるぞ」と。

自分の愛する親なり、夫なり、子女なりが救靈の道を踏み外して滅亡の淵底に滑り落ちようとしてるのを見たら、何人しも平氣で居られまい。聖体の尊前にかけつけよ。主は聖女マダレナに赦し、聖ペトロに赦して下さつた。ユダにでも痛悔さへしたら赦して下さつたであらう。

自分も亦時としては罪惡に汚れて、癩病者の如く腐れ爛れることもあらう。聖体を訪れて、痛悔の涙を溢らしつゝ、「主よ、思召ならば、我を潔くするを得給ふ」と謙つて、主の足下に拜伏したら、主は必ず聖櫃の中より其の慈愛こぼるゝ御手を伸べて、「我意なり、潔くなれ」と答へて下さるであらう。

三、聖体訪問の方法、

今聖体訪問は如何にすべきものぞと云ふに、別に定まつた方法がある譯でない。親しい友にでも出遇つた時の如くすれば可いのである。即ちたゞ二三分間、訪問申すのであれば、拜伏して主の聖体を拜み、愛の情を發し、我身の上に、執つて居る事業の上に、主の祝

福を祈つたばかりで足りる。

然し充分に時間のある時か、或は聖体降福祭に與る時かには、他に心得べき點もある。

天主は昔しユデアの民に向つて「聖所に近く時は戰慄れよ」と曰ひ、又ホレブ山でモイゼスに顯はれ給うた時は、「汝の履物を脱げ、汝の立てる處は聖地なるぞ」と曰うた。聖体の在す聖堂は、實に聖の聖なる所である。謹んだ上にも愼んで近かねばならぬ。聖水をつけるにも、十字架の印をするにも、跪くにも、坐るにも、容を愼み身を恭しくして、決して懶けかへつた態度をしてはならぬ。而して、一、信仰を起せ。「茲に眞の天主が在ず、自分を視て居なさる、自分

の話に耳を傾けて下さる、天使等は數知れず聖櫃を取卷いて拜んで居られる」と思ひ、自分も平伏して拜み奉らねばならぬ。

二、感謝せよ。主の御手より戴いた數々の聖恩、殊に世の終迄も此の狹ぐるしい聖櫃の中に止り給ひ、屢々自分の胸に來て、住んで下さる廣大無邊の恩惠を感謝すべし。又斯る大恩に浸りながら、感謝しようとも思はず、感謝する道さへ知らない人に代つて、篤く感謝せねばならぬ。

三、謝罪せよ。主は人々と共に居るのが、自分の何よりの樂だと思召して、聖体の秘蹟を定め、夜も晝も聖櫃の中に止り給ふのだけれども、聖堂は何時も空虛で、人の影すら見えない。色々と輕侮るも

のは、凌辱めるものは、見捨て顧もしないものは數限りなく見受けらるゝが、訪問に來るものとては、尊び愛して呉れるものとては至て少いのである。されば其を氣の毒がつて、一心に主を敬ひ愛して彼等の忘恩の罪を償はねばならぬ、「主よ、私は御身を愛し奉る。萬事に超えて御身を愛し奉る…如何して人々は御身を愛しないのであらう。如何して御身を獨り此聖櫃の中に打棄て置くのであらう……あゝ如何にかして御身を人々に識らせたいものである、愛させたいものである……」など反覆し〳〵申上げて、主を愛するの赤心を表すべし。

四、恩惠を願へ。主が聖体の中に止り給ふのは、人々に必要の恩惠を與へんが爲である。主は聖櫃の中から、絶えず我等に向つて、「渇ける人あらば我許に來りて飲め」と叫んで下さる。されば我等は、何時でも頼母しい心を以つて、主の尊前に進み、子が父と、夫が妻と、友が友と物語るが如く親しく主と物語り、自分の望む所、氣遣ふ所、怖れる所を遠慮なく打開けて、其御助を求め、其御光を願ひ、其御指圖を仰がねばならぬ。或は自分の靈魂の病を告げて其藥を求め、或は自分の意心の弱いのを訴へて其力を祈り、惡魔の誘の烈しいのを申述べて、之を防ぐ聖寵を乞ひ求むべし。取分け主を心より愛して、死ぬるまで主に背かない聖寵を一心に願ふべし。

自分の爲ばかりでない、他人の爲にも、生ける人、死せる人の別

なく祈るべし。主は何處にでも在せば、何處でゞも聽容れて下さるけれども、殊に聖体の中では、聖寵の溢るゝ御手をひろげて俟つて居なさるから、如何なる聖恩でも、願ひさへすれば與へて下さらぬと云ふことはない。

其他、時としては祈禱文中に在る、「聖体を訪ひ奉る時の祈」、「聖体に向ふ祈」、「耶蘇の聖心に向ふ祈」、「耶蘇の聖心に身を捧げ奉る文」などを徐々、熟心に誦へるのも可い。

終に聖体の靈的拜領を爲し、聖母マリアをも訪問ふべし。マリアは耶蘇の聖母で、耶蘇とは離るべからざる關係があるから、耶蘇を問訪つたものは是非、マリアをも訪問はねばならぬ。

コンタス、

一、コンタスは優れたる祈禱である、

信心の勤行の中に最も易くて、亦最も廣く行はれて居るのはコンタスであらう。朝夕の祈禱さへ善くは知らない信者でも、責めてコンタスを誦へることは知つて居る。嬉しい時もコンタスを手に執つて天主に感謝し、悲しい時もコンタスを爪繰つて慰藉を求めようとするのである。

コンタスは、實に基督信者の暫くでも身を離してならぬ信心の道具である。何人だつて聖母を愛しよう、信心をしようと思ふ人は、成るべくコンタスと親まねばならぬ。

毎晩、家内一同、聖母の聖像か、聖繪かの前に拜跪いて、聲打揃へてコンタスを誦へるのは、熟心な信者の間に行はれる美しい習慣である。

抑もコンタスは、主禱文と天使祝詞と榮誦との三つより成つて居る。主禱文は、主耶蘇が自分で授け給うた禱で、天使祝詞は、天主の聖旨を傳へる大天使ガブリエルの言と、聖靈の默示を蒙つたエリザベトの挨拶の語と、聖會が後で加へた祈の文とで成り、榮誦は三位一體の天主に對する立派な頌辭である。

斯う云ふ優れた祈禱から成立つて居る上に、コンタスは聖母が親らドミニコ聖人に授け給ひ、之によつて數多の聖恩を下してやらう

と約束された祈禱であれば、其の優れて、聖くて、御子と聖母との御意に適つて居ることは言ふまでもない所である。

謂はゞコンタスは、聖母に捧げる愛情の接吻である。聖母の御頭を飾るべき美はしき薔薇の花冠である。我等が現世から「慶哉聖寵みちみてるマリア」と叫ぶや、天に在す天使、聖人等は喜悅面に溢れて、聖母の御前に平伏し給ふのである。

されば、コンタスは聖母の最も喜び給ふ所で、之を怠らず誦へる人は、必ず聖母に愛され、現世に於ても、聖母の特別の御保護を忝うし、天に於ては、聖母の御膝近く侍ることが出來るに相違ない。

二、「慶哉」を何十遍も反覆す理由、

何の爲に、同一じ「慶哉」を何十遍と反覆するのだと、不思議がる人があるが、これは何の不思議もない。

何人かを非常に愛するか、憎むかして居ると、始終其人に對して愛情や、憎惡を表す語を反覆しても飽き足らず思ふものである。小兒は朝から晩まで、「御母さん、御母さん」と口癖のやうに反覆して居るけれど、自分では反覆して居ることさへ悟らぬ、却て反覆す毎に、新しい快味を覺ゑるのである。乞食は何人の門口に立つても、必ず、「願望この哀れな乞食に」と云ふ。凱旋軍隊でも通過る時は、聲は嗄れる迄、「萬歳々々」と反復すけれども、決して耳は痛くない。

我等がコンタスの中に「慶哉」を反覆すのは、即ち聖母を頌めて、

其の天國の凱旋を祝するのである、樂しい母の名を言ふのである、愛の熱氣を外に洩すのである、憐を乞ひ、助を願ふのである。何十遍、何百遍反覆したつて、何の不思議があらう。

三、コンタスを誦へる方法、

コンタスは實に優れたる祈禱である。然し口先ばかりで誦へても格別益がない、殊に又贖宥を蒙るが爲には、其來るだけ、玄義を觀想へながら誦へなければならぬのであるから、今次に其玄義を默想する方法を掲げて置く。但し是は唯だ一例に過ぎないので、他に幾樣にも觀想へることは出來る。又この觀想は天使祝詞の一連宛を誦へる間に起せば可いので、必ずしも主禱文の前でなければならぬと

云ふ譯でない。

ヨンダスの始、

「十字架の印」天主の尊前に進み、諸の天使聖人等と共に、心を合せ、聲を揃へて、聖母を讃美するのだと思ふ。

「使徒信經」、聖會の教を固く信ずる念を發す。

「主禱文」、三位一體の天主を讃美する。

「天使祝詞三遍」、聖母を御父の姫君として、御子の母として、聖靈の御内儀として尊び敬ふ。

喜悦の玄義、（日本公教會の爲）

一、御告、

天主は大天使ガブリエルをマリアの許に遣して、御子の御托身を告げさし給ふ。

マリアは天主の仰を畏まつて、御子の母たることを承諾された。

御子は即ちマリアの胎内に宿り給うた。

最尊きロザリヨの元后よ、願ぐは此玄義の功德によつて、ガブリエルの如く、闇に彷徨つて居る我國の民草に、救靈の難有き福音を齎すべき良司祭を遣し給へ。又御身の如く聰き耳を開いて、其福音を聽き奉る聖寵を、斯民の爲に乞求め給へ。御身を深く尊び敬はれた日本の聖き殉教者の傳達を以て願ひ奉る。

二、御訪問

聖母はエリザベトを訪問ひ給ふ。其挨拶の聲がエリザベトの耳に入るや、ヨハネは母胎に宿りながら、忽ち躍り喜んだ。

其時、彼の元罪は赦され、身は聖靈に滿され、基督の先驅者たるに要する聖寵までも與へられたのである。

エリザベトは覺えず聲を放つて、御子と聖母とを讃め稱へた。

あゝ聖母よ、憐を垂れて斯民を訪問ひ給へ。主の福音を宣傳ふべき人物を我等信者の中に起して、其天職を盡すに必要なる聖寵を乞求め給へ。

其時こゝ斯民も聲ふり上げて、御身と御子の光榮を歌ふであらう。我等の祖先たる聖さ殉教者の傳達によりて願ひ奉る。

三、御降誕、

耶蘇がベトレヘムの馬屋に生れ給ふや、忽ち東方の博士等は奇異の星に導かれてベトレヘムに來り、主を伏し拜んだ。

我國の上に地獄の黑雲の棚引きわたつて、眞理の星が其光を失つたことは隨分久しい。聖母よ、願くは斯民を憐みて其雲を打拂ひ、眞理の星に光を放たしめ給へ。然らば彼等も闇を離れて、老も若も打つれ立ちて、主の御前に拜伏すに至るであらう。

あゝ聖母よ、嘗てベトレヘムの城下が、罪なき綠兒の血に染つた如く、我國も亦數知れぬ殉教者の血に濕つて居る。其血は絕えず御身に向つて哀恤を叫んで居るのに、如何して御耳を傾けて下さらな

いのであらう。

四、祓除の式、

聖母は一點の汚もなき童貞であれば、祓除の式を擧ぐる必要はなかつたけれども、猶は謙つて、此式を行はれた。

此時、御子も亦聖母の汚なき御手を以て、人類の爲に身を犧牲として、父の天主に獻げられた。

あゝ聖母よ、此玄義の功德によつて、斯民を正しき道に歸依らしめ、其の汚れたる心を清めて、新ならしめ給へ。

人類の贖主なる耶蘇よ、御身は生れると間もなく、人類の爲に身を犧牲に備へ給ひたれば、願くは我等の同胞を憐みて、惡魔の手

より救ひ上げ給へ。我等の祖先たる聖き殉教者の傳達を以て願ひ奉る。

五、御子を見出し給ふ、

聖母は御子を見失つて、三日の間と云ふものは、夜を日に繼いで捜し求められたが、三日目にやうゝ聖殿の中で見出し給うた。其時の御喜、果して如何許りであつたらう。

あゝ聖母よ、嘗て盛大を極めて居た日本公教會が滅されて、御身の手より失はれてから、もう三百年の久しきに及んで居る。伏して願くは、斯教會を再び古の盛大に返し給へ。御子を見失つて、闇に迷つて居る斯民を憐みて、一日も早く御子の許に導き給へ。日本の

聖き殉教者の功德によつて願ひ奉る。

悲哀の玄義、（罪人の改心を祈る爲）

一、ゲツマニアの血の汗、

主はゲツマニアの園に入つて祈り給ふ。御苦難の苦汁を盛れる杯は、主の御口に捧げられた。ろれには流石の主も戰ひ慄き、血の汗迄も絞つて、「若し能ふべくば、此杯、我より去れかし」と祈られたが、終に御父の思召に身を托せられた。

主よ、御身は我等の爲に斯る忌々しき杯をも飲み干し給うた。御父の義怒を宥めて我等に救靈を得させんが爲には、如何なる苦痛でも辭り給はなかつたのである。願くは此御悲哀の功德によつて、我

等の罪を赦すと共に、世の哀なる罪人をも憐み給へ。彼等をして其罪を疾く悔い悲しめ給へ。

罪人の依托なる聖母よ、我等の爲に祈り給へ。

二、耶蘇鞭たれ給ふ、

鬼の如き獄卒等は、主を裸體にして石の柱に縛りつけ、手痛く鞭つた。主の玉體は、忽ち、皮破れ、肉裂け、血迸り、目も當られぬ有樣となり果てたのである。

主よ、惡むべき我等の罪科ころ、鞭ともなり、獄卒ともなりて、御身を苦めたのである。今悔み悲んで偏に赦を願ひ奉る。又總て世の哀なる罪人を憐みて、一日も早く、其手に持てる罪科の鞭を拋

げ棄て、御身の尊前に拜跪かしめ給へ。

罪人の依托なる聖マリアよ、我等の爲に祈り給へ。

三、耶蘇茨を冠せられ給ふ、

獄卒等は、主を辱しめんとて、御頭には刺恐ろしき茨を冠らせ、肩には弊れたる朱袍を被せ、手には葦を握らせ、其前に跪いて、「猶太亞の王萬歳」と嘲弄つた。

主よ、我等は今まで御身の統治を喜ばず、御身を君とも主とも尊ばず、却て罪を犯して、惡魔の奴隷となるを喜んだのである。御身の受け給ひし凌辱によつて、我等の罪を赦し給へ。又世の憐なる罪人をも惡魔の手より救ひ上げて、彼等をして、御身を認め、愛し、

一心に御身に奉仕ふるに至らしめ給へ。

罪人の依托なる聖マリアよ、我等の爲に祈り給へ。

四、耶蘇十字架を擔ひ給ふ、

主は重き十字架を擔がせられ、よろめく足を踏みしめ、踏みしめカルワリオの險しき山坂を登り給ふ。途中で幾度となく力盡きて、十字架の下に仆れ給うた。

あゝ主耶蘇よ、御身は十字架と共に、我等の罪を擔ひ給うた。御身が幾度も仆れ給うたのは、我等が幾度も罪に罪を重ねたからである。今心の底より悔み悲み奉る。哀なる罪人をも憐み給へ。御身の十字架の功德によつて、彼等に痛悔の惠を與へ給へ。

罪人の依托なる聖マリアよ、我等の爲に祈り給へ。

五、耶蘇十字架に磔げられ給ふ、

主は御衣を褫ぎ取られ、苦膽を飲まされ、金釘あら〳〵し〳〵十字架に打つゝけられて、恐ろしい罵詈、嘲笑の中に御生命を父の天主に捧げられた。

主よ、御身の死し給ふや、日暗み、地震ひ、巖破れ、刑吏等は痛悔の胸を拊ちつゝ山を降つたのである。願くは御死去の功德によつて、罪人の心を動し、其胸を破りて、痛悔の溜息を洩さしめ給へ。

罪人の依托なる聖マリアよ、我等の爲に祈り給へ。

榮福の玄義、（煉獄の靈魂の爲）

一、御復活、

御死去の後三日目に、主は、眩き許りに光り輝きて復活し給うた。三日前の痛はしき御有樣に引換へて、今日の照り渡れる御身裝を、仰視られた聖母の心は、果して如何に嬉しかつたであらう。

あゝ主耶蘇よ、願くは御復活の功德によつて、私を罪惡の中より甦へらして新しき人となし、以て聖母の御心を喜ばさせ給へ。又煉獄に苦んで居る靈魂等をも憐み、彼等をして、早く天國に復活するの幸福を得せしめ給へ。

憂人の慰藉なる聖マリアよ、我等の爲に祈り給へ。

二、御昇天、

御子は白雲に打乘つて、天に凱旋し、我等の爲に天國の門を開いて下さつた。あゝ我等が唯一の寶たる耶蘇は、天に昇り給うた。我等の爲に、樂の座、榮の臺を備へて、我等を麾いて居なさるのである。

あゝ主耶蘇よ、我等の心を引取つて、一途に天國を望ましめ給へ。御昇天の砌は、無數の靈魂を引具して凱旋し給ひし如く、今も煉獄の靈魂を憐み、彼等の爲に早く天の門を開き給へ。

憂人の慰藉なる聖マリアよ、我等の爲に祈り給へ。

三、聖靈降臨、

御昇天の後十日目に、聖靈は使徒等の上に遣はされ給うた。使徒

等は忽ち聖靈に充され、直に出て主の御教を宣べ、立ろに三千人の歸教者を得られた。

あゝ主耶蘇よ、我等の上にも聖靈を遣はし、我等の心を燃して、御身を愛せしめ、我等の舌を清めて、天の事を語らしめ給へ。又煉獄の靈魂をも顧み給へ。彼等を早く天國に招き、御身の光榮を歌はしめ、一心に御身を愛するを得せしめ給へ。

憂人の慰藉なる聖マリア、我等の爲に祈り給へ。

四、聖母の被昇天、

聖母は何の苦痛もなく、喜悅面に溢れつゝ、息絶にさせ給うた。斯くて罪の汚に染まなかつた其御肉體は、腐敗を見ずして、御靈魂

もろともに、天に昇られた。

聖母が天に昇られ給ふや、聖三位を始め、天國の諸〻の天使聖人等は、擧つて其の光榮ある元后の凱旋を歡迎し給うたのである。

あゝ聖母よ、我等にも、御身の如く身を修め、德を磨いて、天に昇るを得せしめ給へ。御身は煉獄の靈魂の慰藉者にて在せば、彼等を忘れ給ふな。疾く〳〵彼等を慰めて、終りなき休息に入らしめ給へ。

憂人の慰藉なる聖マリア、我等の爲に祈り給へ。

五、聖母、榮福の冠を戴き給ふ。

聖母は親しく御子の手より、榮福の冠を戴き、天使と人類との

元后に立てられ給うた。あゝ我等は、權能すぐれ、慈愛深き保護者を、天國に有つて居るのである。

いかにロザリオの元后よ、御身に從ふ民を愈々殖やし、御身を讃美する聲を益々盛ならしめ給へ。御身は天の元后として、如何なる聖恩でも、自由に賦與へることを叶ひ給へば、願くは煉獄の靈魂を憐みて、片時も早く、彼等を御側へ招き、御子と、御身の光榮を歌はしめ給へ。

憂人の慰藉なる聖マリア、我等の爲に祈り給へ。

一、糺明の必要、

昔し何處かの寺院に「己を識れ」と書いた額が掲げてあつたさうだが、實に己を識るのは、罪を避け、德を修むるに最も必要である。

悲夫、世には萬卷の書に眼を曝す人はあつても、自分の心の中を讀む人は少い。態々廣い世界を漫遊する人はあつても、狹い我身の漫遊を企てる人はない。隨つて自分には如何な不足がある、如何な過失がある、毎日々々如何ほどの罪に落ちて居るか等、悟ることが出來ない。一年に僅か一度か、二度かしか告白もしない癖に、私は何一つ氣に掛ることはありませぬ」と云うて居る。是では幾年立つても不足を改めること出來ない所か、救靈さへ氣遣はしく思はれる。

すべて人が過失に落ち、罪を犯すのは、情慾に引ぱり込まれるか不意に敵から襲れるか、心が迷つて居るかの爲である。所が平生よく〳〵糺明して、我身の上に眼を注いで居る人は、其樣な危險を容易う避けることが出來る。

一、情慾に引ぱり込まれる憂がない。情慾が尙だ小い中に、拔き取らずして置くと、次第に根を蔓らし、葉を繁らして、終には如何しても拔き取ること出來なくなつて、思はず識らず之に卷込まれて了ふのである。然るに、毎晩、怠らずに糺明して、情慾の萌が少でも顯はれると見るや、直樣之を拔き取つて置いたら、見す〳〵罪過の中に引張り込まれる心配はあるまい。

二、敵から不意を撃たれる憂もない。毎日糺明する人は、油斷をしない。兼々自分の不足を見、弱點を覺つて居るので、敵が未だ遙に遠い中から用心をして、避くべきは避け、攻むべきは攻め、備ふべきは備へて置くから、惡魔に一杯喰はされる氣遣がない。

三、心の迷ふ恐がない。平生、心の隅々までも糺べて居るから、惡魔の隱塲がない。如何ほど巧な謀略を運らしても、如何ほど密に忍び入らうとしても、直に看破られて了ふ。隨つて、自分の目に横つて居る梁を見ずして、他人の目の塵を拂つてやらうとしたり、或は一握の飯でも人に施すと、直に大きな慈善でもしたかの樣に鼻を高めたりして、却て自分の怒り易い、職務に懶ける、祈禱を善くし

ない事などには一向氣が附かないやうな失態に陷る憂はないであらう。

二、糺明の二種類、

糺明には、一般糺明と、特別糺明との二種類がある。

一、一般糺明、

一般糺明とは、毎晩床に就く前に、其日の出來事を吟味することである。商人は店を終つたら、直に算盤を握つて、其日の損益を勘定する。基督信者も同じく、夕の祈禱の後、心靜に一日の思、言、行、怠に就て、糺明して見なければならぬ。今日は如何なる人と交り、如何なる事を爲し、如何なる事を思つた、何か爲てならぬこと

を爲たことはないか、爲べき筈のことを怠つたことはないか、何處から此儲は出た、此損は來た等と調べて見たならば、必と爲べき事を怠つた事や、爲ても等閑に爲た事や、肉慾に引かされたり、利己心に負かされたり、暴々しく振舞つたり、悲哀、喜悅の爲に度を失つたり、徒に時を費し、無益な喋言をし、空想に耽り、飲食を過したりしたことなどに氣が附いて、顏を赤めるに相違ない。

不足過失を認めて、顏を赤めた許りでは足りない。天主の尊前に謙つて、痛悔し、赦を願ひ、明日は決して今日の過失を再びすまじと決心して、其決心を守る爲の聖寵を願つて置かねばならぬ。

若しや大罪でも犯して居たら、聖母の傳達を以て、完全なる痛悔

を起し、なるべく早く告白しようと決心すべし。一晩でも、大罪を抱きながら、安心して眠れるものでないのだから。

要するに、一般糺明とは、靈魂上の損益の勘定であるが、始は少々面倒の樣でも、慣れたら何でもない。時間も、二三分間で充分である。非常に疲勞れた時などは、夕の祈禱は、只だ主禱文、天使祝詞、使徒信經、告白の祈だけにしてでも、糺明して、痛悔の祈を心より誦へることだけは怠つてならぬ。

斯う云ふ樣にすれば罪は赦され、心は安堵して眠に就くことが出來る。

二、特別糺明、

一般糺明は、自分の不足を認めるのには極めて肝要であるが、是ばかりでは、其の認めた不足を悛めることは出來ない、頭髪見たやうに弱いものでさへ、幾百條も合せて大繩に綯つたら、容易に斷れはしないのに、況して年久しく搦みついた數々の不足を、一般糺明を以て一度に皆な打破つて了ふと云ふのはナカ〳〵難しい。是に於て特別糺明の必要が起るのである。

特別糺明とは、讀んで字の如く、或る一つの不足に就て、特別に糺明することである。謂はば全力を傾けて、敵の一地点を攻撃するのであるから、前以て何處を攻めようと決定て置かなければならぬ。

昔しシリアとイスラエルと戰つた時、シリア王は「唯だ敵王アカブを狙へ、他を顧るな」と全軍に命じて大勝利を獲た。特別糺明を以て自分の不足と戰ふにも、常に此法を用ふるのである。即ち自分の不足の中に、最も人目にも立ち易く、天主の聖意にも適はず、德の進路の障碍ともなる頭不足を目蒐けて、側目もふらずに攻めかかるのである。大將さへ仆したら、殘餘を攻取るのは造作ない。

然し一の不足でも、一度に易々と破れるものでない。なるべく幾個にも區別して、之を東から、西から、南から、北から、氣永に攻撃するが可い。例へば、

言語に就ての不足を改めようと思はば、初の一週間、或は一ケ月

間は、

先づ、　他人と口爭などしない事にする。

夫れが思ふ通りに出來たら、

其次には、　他人の事を惡く言ふまい。

又　其次には、　故なく自分の事を人の前に語るまい。

又　其次には、　他人の事は、なるべく善さ樣に言ひ做さう。

終には、　なるべく無駄口を叩くまい。

清淨の德に就てであれば、

一、危いものを一つも見るまい、一行も讀むまい。

二、淫猥がましい語は、決して聽くまい。

三、淫奔な思が發つたら直に之を防ぐ、少しでも心に留めまい。

四、他人の手足などにも觸れまい、他人にも觸れさせまい。

其他は推して知るべし、如何ほど强固に構へた不足の城でも、此法を以て攻落されないと云ふものなく、如何に六ケしい德でも此法によつて修めきれないと云ふはないのである。

今次に特別糺明の方法を略し記して置く。

一、朝起きた時、糺明の題目に眼を注ぎ、是非今日は此点に注意しようと決心して、天主の御助力を祈る。

二、晩に一般糺明の前か後かに、細かな糺明をする。

三、過失がなかつた時は、天主に感謝して、愈々其御助力を求め

る。不幸にして過失があつたら、謙つて悔み悲み、赦を乞ひ、何故、此過失があつたのだらうと、其原因までも探つて、再びかゝる事のない樣決心する。

四、償を自分で命ずる。法律規則は如何に立派でも、破つた時に制裁を加へなくては、ろれころ死文、死法で、何の効もあるものでない、されば過失の輕重に應つて、跪いて主禱文を誦へるとか、過つた數だけ胸を打つとか、或はろれだけ天使祝詞を誦へるとかするが可い。

夕の祈禱と就床、

一、夕の祈禱の必要、

日は暮れた、夕の祈禱をしなければならぬ。

朝、目が醒むるや、眞先に天主を思つたから、晩にも、目を閉ぢようとする時、天主を思はなければならぬ。

天主は一日中、百の禍より自分を遁し、千の惠を與へて下さつた、感謝すべき筈ではあるまいか。

罪も犯したであらう、赦を願はなければならぬ。

今晩閉ぢた目が開かる時は、或は天主の裁の庭に立つて居るかも知れぬ。天主の御手に自分の靈魂を委托け置く必要があるまいか。

然らば、夕の祈禱は、一日の終に、天の父に接吻して、最後の御辞儀をするのである。

受けたる聖恩を心より感謝するのである。

謙つて罪の赦を乞求むるのである。

自分の靈魂を、仁愛の溢れてる天主の御手に托けるのである。

斯う考へると、夕の祈禱は、朝の祈禱にも劣らず大切である。一晩でも怠つてならぬものである。

然し唯だ誦へるばかりでは足りない、善く誦へなければならぬ。僅か十五分足らずの祈禱でないか。ろれに、床に這入つて、横臥んだ儘誦へるとか、或はベタリと座り込んで、フラ〳〵居眠りながら誦へては、却て天主に對して無禮であらう。成るべくは跪いて、身も心も恭しくして誦へなければならぬ。餘り疲れた時などは、全部

殘らず誦へるには及ばぬ、少しでも可いから、唯だ熱心に、慎んで誦へて欲しいものである。

二、家内一緒に誦ふべし、

朝の祈禱にせよ、夕の祈禱にせよ、成るべく家内一同、聲を揃へて誦へるが可い。昔から熱心な信者の家庭では、夕飯を終つたら、福音書か、聖人傳かを二三頁讀んで暫く休み、愈々床に就くと云ふ前には、親も子も、十字架なり、聖母の聖繪なりの前に拜跪き、聲打揃へて夕の祈禱を誦へる習慣がある。

共同に誦へる祈禱は、天主の悅び給ふ所でもあれば、其聖意を動かすにも力がある。主基督は約束し給うた、「汝等の中二人地上にて

同意せば、何事を願ふとも、天に在す我父より賜はるべし、蓋し、我名を以て二三人相集れる處には、我れ其中に在り」と

加之、父母が拜跪いて熱心に祈るのを見て、子女も自然と善く祈るやうになる。兄弟姉妹は毎日一緒に列んで、一つ心、一つ口で祈禱をすれば、知らず〳〵互に敬ひ愛し、互に不足なども耐へるやうになる。居眠つても互に揺り起して貰へる、祈禱の文でも、態々學はなくても、何時の間にか覺えて了ふ。

成るほど多人數一緒に祈るよりも、一人で祈つたら、心も靜で、氣も散らず、熱心に祈らるゝから氣持が可い。然し一緒に祈つた方が、天主の聖意にも適へば、御互の爲にもなるから、なるべく一緒

に祈ることにしなければならぬ。

家庭によつては、それが出來難いのもある。父なり、兄なりが全く無宗教となつて、少しも頓着しない家庭も往々見受けられる。かゝる家庭にあつては、母だの、姉妹だのが家庭の守護の天使になつた心持で、一緒に聲を揚げて熱心に祈り、次第〳〵に、父兄の心に宗教心を皷吹んでやらねばならぬ。一時に其結果が顯はれるものでないが、然し一度は其熱心が天主の前に通つて、終には家内一同、十字架の前に拜跪くやうにして下さるに相違ない。

三、就床、

夕の祈禱を終つたら、無益な雜談などしないで、早く寢るが可い。

遲く寢たら、朝早く起きられないで、身躰にも、靈魂にも大害を招くものだと云ふことは、既に述べたる所である。

床に就には、先づ聖水を振つて惡魔を拂ひ、十字架の印をなし、イエズス、マリアの聖名を呼び、守護の天使に身を托すべし。

猶又朝起きた時の如く、熟心に天使祝詞を三度誦へ、一度毎に「あゝマリア云々」を加へて、汚なき童貞マリアの傳達によつて、清淨の德を願ふべし。

床に就てから、先づ自分の頭に浮べねばならぬことは、死の觀念である。床は棺の姿、夜具は即ち屍骸を包む布片、床に仰臥になつてるのは墓に入つた心持がするであらう。目閉ぢ、耳塞がり、五体

動かず、全で死人のやうでないか。眠つて居る間は、親にも離れ、子にも別れ、貨財も、名譽も、快樂も、苦痛も、すべて皆な忘れて了ふ、死人と少しも變つた所はない。夜の闇は、墓の中の闇黑を想ひ起さして、恰當、生ける人と死せる人とを裁かん爲に、主基督が降臨し給ふ曉まで、墓の中に休んで居るのに最も善く彷彿つて居る。

されば、眠に入る前か、或は眠られぬ晩などは、直に死の觀念を呼び起さねばならぬ。

「若し今死ぬと云へば、自分は如何なる宣告を受けるであらう」。

「今でも死んで、地獄に落ち込むものが居るか知れないのである」。

「今頃、甚い病苦に惱されて居る病人もあるであらう」。

「今時分、煉獄には甚い〳〵痛苦に悶えて居る靈魂もあらう。自分は、少しの祈禱で、彼等を救うてやられる」。

斯う云ふ考を起して、彼等の爲に天使祝詞の一度でも誦へてやつたら、如何ほど彼等の慰藉となるであらう。悪しい思を防ぎ、良からぬ想像に打克つ爲にも、死の觀念は大に助になるのである。「汝の終焉を念へ、然らば永遠に罪を犯さじ」と聖書にもあるでないか。

毎週の要務

一週を聖くすること、

一日を聖くする如く、亦一週をも、聖くしなければならぬ。それが爲に聖會では舊くから、一週にそれ〳〵特別の敬虔を割當てる習慣がある。即ち日曜日には聖三位を、月曜日には守護の天使を、火曜日には十二使徒を、水曜日には聖ヨゼフを、木曜日には聖体を、金曜日には我主の御苦難、或は聖心を、土曜日には聖母マリアを特別に尊崇ぶと云ふのが聖會一般の習慣になつて居る。

今次に、其敬虔の理由と之を行ふ方法とを略し記して置く。然し

我主の御苦難だけは第一編に附錄として載せてあるから茲には之を省く。

日曜日、　聖三位、

(一)、天主が三位にして一躰、一躰にして三位であらせらるゝことは、人の智もて悟り得らるゝ所でないから、信ずるより外に道はない。天主が一たび之を啓示された以上、之を信ずるのは當然でないか。偽りもすれば、誤りもする人間の言葉さへ、我等は常に信じて居るのに、況して偽ることも、誤ることも出來ない神樣の言葉が信じられぬ道理があらうか。

而して三位は孰も全能にして能ひ給はざる所なく、全知にして知

り給はざる所なく、限りもなく善にして限りもなく愛すべく、天地を造り、万物を支配し、始もなく、終もなく、何處として在さざる所なしである。

諸の天使聖人等は、始終、其尊前に拜伏して、「聖哉、聖哉、聖哉、萬軍の主なる神、主の光榮は天地に充滿てり。願くは父と子と聖靈に光榮あらんことを」と叫んで居られる。

されば我等も此玄義の奥深く、玄妙不可思議で、自分の淺墓な智もて、到底測り知らるゝ所でないことを思ひ、深く謙つて之を信じ、天使聖人等と共に、聖三位の光眩き稜威の前に拜伏さねばならぬ。

（二）、聖三位に對して、燃ゆるが如き信仰を捧ぐると共に、亦心の底より其の海山啻ならぬ大恩を感謝しなければならぬ。我等の辱うしたる大小の聖恩は、皆な之れ聖三位より流れ降つたものである。

先づ、御父は我等を御自分に像つて造り下さつた。我等を樂ましてやらう、幸福ならしてやらうと思召して、我等の爲に天地万物を造り、其の全能の御手を伸べて、夜晝我等を呵護り、扶助け、天國の終りなき福樂までも、我等の爲に備付けて下さつたのである。

御子は、我等の罪を贖つて、御父の備へ置かれた天國の終りなき快樂を、我等に得させようと云ふばかりで、態々現世に天降り、馬

屋に生れ、三十三年の間、具さに苦勞艱難を凌ぎ、終には十字架に釘けられて、無慘な死を遂げられた。

聖靈は我等の内心に住み、我等の胸に愛の火を燃して下さる。我等が益々不足を悔め、善を修め、德を積み、天主の聖意に適ふ丈けの、人物となれる樣、始終勸めて、戒めて、敎へて、導いて下さるのである。

斯の如く聖三位は、此の卑しい、罪深い人間を愛して、片時も忘れて下さらないから、我等の方でも、この聖三位を一心に尊び愛して、聊たりとも感謝の誠意を表さねばならぬ。決して今迄の如く御父から戴いた立派な肖を汚して、惡魔の醜くい肖とする樣な不孝

をしてもならねば、御子の大恩を忘れて、再び十字架に磔ける樣な不埒をしてもならぬ。却て何事によらず、此御子を鑑と仰ぎ、之に法る樣、努めなければならぬ。

猶は聖靈は、我等の心を聖堂として、之に住つて下さるのに、我等は幾度か此聖堂を汚したり、惡魔を引込んで聖靈を逐出したりしたか知れない。今一心に悔み悲んで赦を願ひ、今後は聖靈の勸に耳を傾け、其訓導に從つて、天晴の基督信者とならねばならぬのである。

(三)、日曜日は主日と迄云はれて、聖三位に獻げられた日であるから、之を善く守るのは最も聖三位の聖意に適ふ所以である。

日曜日には勞働を休み、ミサ聖祭に與らねばならぬと云ふことは天主の第三誡と、聖會の第二の制令とを以て命じてある。苟くも基督信者と云ふ名譽を戴いて居る以上は、知らない者は無い筈である。

我等は六日間働いて、七日目には聖堂に參詣し、ミサを拜聽して去る一週間に、天主より戴いた聖恩を感謝し、來る一週間には、一段と豐な祝福を添うする樣、祈つて置くべきであるまいか。

だから六日間は、自分の有と云つても差支ない、充分自分の爲に使用つても宜しい。然れども日曜日一日は天主の有である、たゞ天主の爲にだけ使用はなければならぬ。もし故なくして之を自分の爲

に使用つたら、それこそ天主のものを盗むのである。して天主のものを盗んで働いても、其れが自分の益になるかと云ふに、決して其機でない。

「施與は決して人を貧しうせず、朝夕の祈禱は決して仕事に後れさせず、日曜日の勞働は決して人を富ませず」と云ふ諺さへもあるでないか。

日曜日に勞働を休むのは、第一にミサを拜聽する爲であるが、然しミサを拜聽したばかりでは、主日を立派に守つたとは云ひ難い。午後には聖体降福祭もある。ミサは朝の祭で、聖体降福祭は夕の祭である。出來るだけ之にも參拜つて、聖体を尊敬し、其大恩を感謝

して、人々が聖体に加へる輕侮、凌辱を償ひ參らすことにしたら、必ず聖体の豐な祝福の露に霑ふことが出來るであらう。

其他、日曜日には、說教もある、教理の稽古もある、なるべく之を缺がしてはならぬ。多くの人は初聖体が終つたら、もう卒業證書でも握つた考で、公教要理の書などは、全く筐の底に藏ひ込んで少とも顧ない、說教なども、口實を設つて成るべく遁れようとする。爲に宗教上の智識は次第に曇り信仰も次第に衰へて、とゞの詰りは名ばかりの信者となり了るのである。

終に平生は俗務に追はれて出來ないから、日曜日の餘暇を利用つて、靈的讀書やら、聖体訪問やら、コンダスやら、病人の見舞やら、

總で善業を勵まねばならぬ。

要するに、日曜日に勞働を休むのは、ブラリ〳〵と遊び廻る爲でない。肉躰を休まして精神を働かせる爲である。我身の上を暫く忘れて、天主の事を思ふ爲である。心を浮世の事物より引離して、高く天の上に迄昇せる爲である。うれを間違へて、日曜日はたゞ骨休の時だ、遊興の日だと考へ、朝のミサでも其こ〳〵に拜聽すると、もう何も彼も投げ棄て、遊興に耽り、飲食に溺れ、無駄話、誹謗、讒言などして、天主を尊ぶことはさて措き、却て罪を重ねて天主の聖名を汚すものが年と共に多くなるのは、嘆かはしい次第である。

決心、

一、なるべく丁寧に十字架の印をする。

二、榮誦を唱へる時に恭しく頭を下げる。

三、日曜日を正しく守る。

月曜日、守護の天使、

天主は人毎に守護の天使を附添はして、其身躰を護り、其靈魂を援け、善を勸め、惡を避けしめて下さる。我等は天主の聖恩の廣大にして、限りも涯しもないのを感謝すると共に、亦平生、守護の天使を敬ひ愛し、之に深く依賴まねばならぬ。

(一)、守護の天使を敬ふべし。守護の天使と云へば、人よりも優れたる智と力を備へ給ふ靈である。天に於て、天主を面に眺めて、